
COMMANDO DAYS

losepact

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COMMANDO DAYS

【Nコード】

N3035T

【作者名】

losepact

【あらすじ】

アリアス一味を倒し、ベネットと決着をつけた元コマンドー部隊の隊長、ジョン・メイトリックス退役大佐は再び平穏な生活を手に入れた。

それから五年後、異世界フロニャルドにてメイトリックスの新たな戦いが始まる！

更新はやや遅めです、すいません。

ちなみに作者は若干文才が低いです。

召還だ？寝言言ってんじゃねえよ（前書き）

ご意見、ご感想お待ちします！

召還だ？寝言言ってんじゃないよ

ここはフロニヤルド、ビスコッティ共和国・フィリアンノ城。

この城の会議室のような場所で、作戦会議が行われていた。

「今回は本当に負けることのできない戦いです…ですから、最後の切り札を使おうと思います！」

真剣な表情でそう言うピンク色の髪の少女。

よく見るとその少女の頭には犬の耳のようなものがある。

いや、この部屋にいるすべての人間に犬の耳がついていた。

「ビスコッティ共和国代表、ミルヒオーレ・F・ビスコッティの名
において…我が国に、勇者を召還します！」
フィリアンノ

*

「…よし、これでいいな」

某日、ジョン・メイトリックスはいつものように森から木を一本運んでいた。

ベネットを倒してから何一つ変わらない日常…だが、ひとつだけ違っていることがあった。

「ジェニーが留学して、もう三年か…」

そう、アリアス一味を倒してから二年後、一人娘のジェニーはバルベルデ共和国への留学を希望したのだ。

もちろんメイトリックスは反対した。あの時のような恐怖がもしまたジェニーを襲いでもしたら…

しかも自分とは離れて暮らすこととなる。

だがここで、天の助けが下りたのだ。

かつて自分がコマンドー部隊の隊長だった頃、支援していた現バルベルデ大統領・ベラスケスがジェニーの援助を申し出てきたのだ。

彼はメイトリックスを革命の英雄と信頼しており、いつか恩を返そうと思っていたらしい。

結局ジェニーとベラスケスの説得により、メイトリックスは彼女の留学を許可し、現在に至る。

そして本日より16日後、夏休みでジェニーが帰ってくることになったのだ。

早くジェニーの顔が見たい…メイトリックスはその一心だった。

ガクッ…！

だが考え事をしたことが災いし、メイトリックスは足を踏み外し、崖に身を乗り出す態勢になってしまった。

「しまった…！」

だがここは元コマンドー、崖に手を掴んでいたので落ちずに済んだ。代わりに担いでいた丸太が崖下の闇に吸い込まれていった。

やがてそこから、バキッという乾いた音が聞こえてきた。

「早く…上がらねば！」

手に力を入れるメイトリックスだが、掴んでいた岩の部分が剥がれていくのに気がついていなかった。

ボロボロボロッ…グシャアアア…！！

大きな音を立て、完全に岩が剥がれてしまい、今度こそメイトリックスは崖下へと放り出されてしまった。

「うおおおあああああ…！！」

メイトリックスと地面の距離が急接近する。

（もっ…駄目か…？ジェニー…）

娘の顔を思い浮かべたその時、崖の下、岩陰で黒い影が動いた。

「…！？」

その正体は茶色い犬だった。

だがその犬は、若干短めの剣を縦に咥えていた。

「バウッ！！」

一度吠えたその犬は、咥えていた剣を地面に突き刺した。

その途端、紫色の光が刺した箇所から溢れ出し、巨大な魔法陣が出現した。

「な…なんだあれは！？」

メイトリックスは動揺する。

だが地球の重力には逆らえず、その魔法陣の中心の穴に吸い込まれていった。

そして先程の犬も穴に飛び込み、魔法陣は姿を消した。

召還だ？寝言言ってんじゃねえよ（後書き）

ちよつとメイトリックス大佐の口調が変かもしれません。

今後ともよろしく願います！

何故シンクを使わず、俺を呼んだんです？（前書き）

どこかのバカ作者がお前が適任だと推薦したんだよ

更新は遅いと言ったな、あれは嘘だ

何故シンクを使わず、俺を呼んだんです？

その頃フロニヤルドでは、ピンク色の髪の少女が遺跡のような場所へ勇者召還されたメイトリックスを迎えに来ていた。

少女が見上げる先には、紫色の光に包まれたメイトリックスが空から降ってきたところだ。

「ううッ…！」

あまりの高さに目をつぶるメイトリックス。

飛行機からも飛び降りたことのある彼だが、ここまで高くはなかった。

ドシャアアアン…！！

やがて紫の光は遺跡の真ん中に着地し、座り込んだ状態のメイトリックスが姿を見せた。

「…ん？あれは…女の子か…？」

目を開けたメイトリックスは、少女の存在に気がついたようだ。

だが彼には一つ気になったことがあった。

（なんであの子には犬みたいな耳や尻尾があるんだ…？）

「は、初めまして！召還に応えてくださった勇者様でいらっしゃいますね！」

メイトリックスの疑問を余所に、少女が口を開いた。

「…勇者だつて？」

「私、勇者様を召還させていただきました、ここビスコッティ共和国・フィリアン^{フィリアン}ノ領の領主を務めさせていただいております、ミルヒオーレ・F・ビスコッティと申します」

ミルヒオーレと名乗ったその少女はニコツと笑うが、メイトリックスはまだ状況を飲み込めずにいる。

「あ…ああ、俺はジョン。ジョン・メイトリックスだ」

「勇者ジョン様ですよ。存じ上げております！」

ミルヒオーレがそこまで言った時、メイトリックスの頭上から先程の茶色い犬が降りてきた。

「タツマキ！勇者様のお出迎え、大儀でした！」

「お、おい。どういふことか説明してくれ！」

事情を聞こうとするメイトリックス。

「勇者様におかれましては召還に応えていただき、ここフロニャル

ドにお越しいただきまして、誠にありがとうございます。私達の話
を聞いていただき、その上でお力をお貸しいただくことは可能でし
ようか？」

「…そうだな、話を聞かせてもらおうか」

ピュ~~~~ツ…バンツ!!バンツ!!

空に花火が打ち上げられた時、ミルヒオーレの穏やかな表情が焦り
に変わった。

「…いけない!もう始まっちゃってる!」

「な、何だ?」

相変わらずメイトリックスは話についていけない。

「我がビスコッティは今、隣国と戦をしています!」

「なるほど…だから元コマンドーの俺が呼ばれたわけか…」

「はい。とにかくついてきてください!」

そう言ったミルヒオーレは走り出し、メイトリックスもその後を追
う。

その先にはダチョウのような生き物が立っていた。

「なんだこいつは…鳥なのか？」

「セルクルをご覧になるの初めてですか？」

その生き物はセルクルというらしい。

ミルヒオーレは不思議そうな顔でメイトリックスを振り返る。

「ああ、俺の住んでいる山には生息してないんだ…」

するとミルヒオーレはセルクルに跨り、

「私のセルクル、ハーランです。どうぞお乗りください！」

そう言い、メイトリックスに手を差し出した。

*

二人を乗せたハーランは全力疾走し、その後ろをタツマキが走ってついてきている。

「隣国ガレットと我が国ビスコッティはたびたび戦を行っているのですが、ここところはずっと敗戦が続いていて…幾つもの砦と戦場を突破され、今日の戦では私達の城を陥落させる勢いです」

ハーランが走っている道の崖下には、ガレットの者達と思われる兵

士の大軍がセルクルに跨ってフィリアンノ城を目指していた。

「ガレット獅子団領の領主、レオンミシェリ様と渡り合える騎士達も今は不在で…」

ミルヒオーレの目線の先には、先頭のセルクルに乗っている少女がいる。

「ですから、勇者様に力を貸していただきたいんです！」

「いや、俺はもう軍隊の人間じゃない。今はただの木こりだ」

「そんなご謙遜を！勇者様のお力はよく存じ上げております！」

ミルヒオーレがそこまで言った時、ハーランが急ストップをかけた。

そこは、とても見晴らしのいい崖だった。

そこからでも戦場の様子は確認できる。

兵士達の雄叫びや花火の音が、混じって聞こえてくるのだ。

*

「……」

戦の様子を窺うこと数分、メイトリックスは拍子抜けしたような表情を浮かべている。

「これが…戦なのか…？」

そう、今までメイトリックスが潜り抜けてきた戦場とは違い、誰も死なず、血も流さない。

「はい。戦場をご覧になるのは初めてですか？」

「ああ。だが、戦の割には随分平和だなと思ってな…死人が出る様子もなさそうだ」

するとミルヒオーレは目を丸くした。

「とんでもない！この戦は、大陸全土に定められたルールに則って正々堂々行つものですから。怪我や事故が無いように努めるのは、戦開催者の義務です」

「い…戦開催者…？」

驚いた様子のメイトリックス。当然である。

自分が今まで体験してきた戦とは、戦いを始めるのはいつも政治家や上層部、死人が出て当たり前、ルールもへったくれもないものなのだ。

「ですから、フロニヤルドの戦は国民が健康的に運動や競争を楽しむための行事でもあるんです」

そう言ったミルヒオーレは、メイトリックスの手をとった。

「…敗戦が続いて、我々ビスコッティの国民や騎士達は寂しい思いをしています。何より、お城まで攻められてしまったとなれば、ずっと頑張ってきた皆はとてもシヨンボリします」

その時メイトリックスは、娘のジェニーがこういった話の本を持っていることを思い出した。

「…その…お姫様とやら」

「は、はい？」

「俺は…一体何をすればいい？」

その時、ミルヒオーレの瞳に希望が戻った。

「手伝っていただけのですね！？」

「ああ。かつて俺も、ある意味この世界よりも滅茶苦茶なドンパチに巻き込まれたことがあるからな。自慢じゃないがこういうことは慣れている」

するとミルヒオーレは尻尾を振りながらメイトリックスの手を握った。

「ありがとうございます！では急いで城に戻りましょう！装備も武器も揃えてありますから！」

ハーランの方を向いたミルヒオーレは、手の甲から何やらピンク色

の小さな魔法陣を出現させた。

その魔法陣から光が発せられ、それを浴びたハーランがたたんでいた翼を広げた。

「では、勇者様！」

ミルヒオーレ、メイトリックス、タツマキがハーランに飛び乗ると、ハーランは崖から飛び立ち、フィリアンノ城へと向かって飛んでいた。

*

《今大変なニュースが入りました！ミルヒオーレ姫がこの決戦に勇者召還を使用しました！》

実況者の一人、フランボワーズがやや興奮気味に現状を伝える。

《さあ、ビスコッティの勇者はどんな勇者だ！？》

「姫様、勇者様来てくれたんですね！？」

「はい。私達の素敵な勇者様です！」

無事帰還したミルヒオーレは、若年研究士のリコッタからマイクを

受け取った。

《ビスコッティの皆さん、ガレット獅子団領の皆さん、お待たせしました！近頃敗戦続きの我らがビスコッティですが、そんな残念展開は今日でお終いです！》

ミルヒオーレの放送を聞き入っているのか、戦場の兵士達の動きが止まった。

《ビスコッティに希望と勝利をもたらしてくれる、素敵なお勇者様が来てくださいましたから！！》

ミルヒオーレがそう言ったのと同時に、戦場のモニターに防弾チョッキを着用し、岩場に立っている男の姿が映った。

その正体は勿論メイトリックス。ビスコッティに召還された勇者だ。

《さあ！華麗に登場していただきましょう！！》

「とっッ！」

メイトリックスは岩場から飛び降り、地面に着地する。

そして、持っていた機関銃（弾丸はゴム製）を肩に乗せた。

「…お姫様に召還された元コマンドー、ジョン・メイトリックスだ」

何故シンクを使わず、俺を呼んだんです？（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしてます！

前書きであんなこと言いましたが、次はちょっと遅いかもしれません。

ですがこれからもよろしく願います！

ガレットはオシオキだっちゃ♪ (前編) (前書き)

タイトルの元ネタはジングル・オール・ザ・ウェイの、悪い子はオシオキだっちゃ♪ です。

今回からコマンドーネタをなるべく取り入れていきたいと思えます！
ちなみにメイトリックスは紋章術の類は使いません。

ガレットはオシオキだっちゃ♪（前編）

「…お姫様に召還された元コマンドー、ジョン・メイトリックスだ」
メイトリックスがそう名乗ったと同時に、フランボワーズが盛り上がった。

《つ…ついに勇者が現れましたあ！！我々も見るのは初めてです！
！な…なんとあ！筋肉モリモリ、マッチョマンの勇者だー！！！！
！》

実況中継を余所に、メイトリックスはビスコッティ騎士団の団長、
ロラン・マルティノッジに駆け寄った。

「あんたが部隊の指揮官らしいな。事情はお姫様から聞いている。
俺は何をすればいい？」

「…では勇者殿、前に進んで先陣のエクレールと合流を！」

「オツケイ！」

メイトリックスはそう言うと、侵攻してくるガレットの集団に突っ込んでいった。

「うははあ！マジで勇者だ！」

「勇者を倒したら俺ら凄くね？」

一方、メイトリックスの恐ろしさを全く知らないガレット兵達は虎の狸の皮算用をしていた。

「やったるぞおおおらぁあー!!」

そう叫んだ彼らは剣を構える。

「こいつらはただの力カシか…」

ドドンー!!

ボソツと呟いたメイトリックスが一瞬で機関銃を携え、引き金を引く。

撃たれたガレット兵達はねこだまに変化し、その場にうずくまった。

だが彼ら以外にもガレット兵は沢山いる。

メイトリックスは襲い来るガレット兵達を機関銃や拳でなぎ払っていった。

《…え…は…は…速い!!何をしたのかよくわかりませんが!!》

実況担当のフランボワーズにバナード、ビオレが啞然とする。

彼らは一瞬、メイトリックスが何をしたのか理解出来なかった。

そうする間にも、ビスコッティ側の撃墜スコアが次々と増えていく。

《ここから奇跡の逆転なるかぁ！！？》

*

一方、城から少し離れた場所にて、ガレット兵の大軍と対峙する一人の少女がいた。

「姫様の決断とはいえ…別に勇者などいなくても！」

そう言った少女、エクレール・マルティノッジは携えている短剣から衝撃波を飛ばす紋章術を大軍に放った。

ドガアアアアン！！！！

爆発が起き、沢山のねこだまが吹き飛んでいく。

だが…

「うおおらああッ!!」

運良く爆発から逃れた一人のガレット兵が、エクレールに襲いかかっ
てきた。

「し、しまっ…」

バキッ!!

鈍い音が響くと同時に、ガレット兵の腹部に拳がめり込んでいた。

「ぐおおああッ!?!」

彼は悲鳴をあげ、ねこだまに変化した。

(い、今のは…)

エクレールが振り向くと、そこには防弾ジャケットを着用した長身
の男が仁王立ちしていた。

「大丈夫か?」

それは、多くのガレット兵達を突破してきたメイトリックスだった。

「あ…ああ、何とか…」

紋章砲はガレット兵達を飲み込み、それを逃れた兵士達はメイトリックスに狙撃され、次々とねこだまへと変化していった。

やがて、気絶していないねこだま達はそこから逃げ出した。

「紋章砲は便利だが、防具や甲冑を装備した騎士には防がれることが多い。それに何より…」

「撃つと疲れるのだろうか。俺には真似できんよ」

どうやらメイトリックスは、エクレールに一目置いたようだ。

「…!？」

エクレールが何かに気付き、メイトリックスの前に立った。

なんと先程、彼女が撃った紋章砲と似たような光が迫ってきたのだ。

「ぐ…ぐッ…!」

短剣で受け止めるエクレールだが、受け止めきれずに弾き飛ばされてしまった。

「うわああああッ!」

メイトリックスは慌ててエクレールを抱き止めるが、彼も少し吹き飛んでしまった。

「ほんのちびつと期待をして来てはみたが…所詮は犬姫の手下か」

二人が声のした方を向くと、黒いセルクルに乗った銀髪の少女の姿があった。

城に来る前、目撃した少女だ。

「あ…レオンミシエリ姫…！」

エクレールが驚いた表情を浮かべる。

「あれが…ガレットのお姫様が」

呟くメイトリックスだが、レオンミシエリはニヤリと笑った。

「チツチツ…姫などと気安う呼んでもらっては困るのう。我が名はレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ。ガレット獅子団領国の王にして百獣王の騎士！」

そして息を吸い込み、

「閣下と呼ばんか！この無礼者があッ…！」

物凄い迫力で叫んだのである。

だがメイトリックスは冷静だった。

「面白い奴だ、気に入った。倒すのは最後にしてやる…！」
彼は静かにそう呟いた。

ガレットはオシオキだっちゃ♪ (前編) (後書き)

ご意見、ご感想お待ちしています！

ガレットはオシオキだっちゃ ♪ (後編) (前書き)

皆様からのご意見、ご感想お待ちしています！

作者の励みにもなりますのでw

ガレットはオシオキだっちゃ♪（後編）

《きたあ！きました！レオンミシエリ閣下、戦場到着！！》

「ははははは！それはさておき、ワシは先に進ませてもらう！
ハイヤッ！」

レオンミシエリはそう言うのとメイトリックス達に背を向け、去っていった。

*

「撃て！！」

ビスコッティ兵達が、侵攻してきたレオンミシエリに矢を放つ。

だがレオンミシエリは攻撃を全て弾き返し、彼らを返り討ちにした。

《凄い！凄すぎる！！レオ閣下、凄い勢いでエリアを抜けていきます！！》

「駆け抜けるぞ、ハイヤッ！」

レオンミシエリがすべすべ床の吊り橋エリアを駆け抜けようとした、

その時だった。

「させるかーーーーー!!」

なんと先程置き去りにされたメイトリックスとエクレールが、レオンミシエリを追ってきたのだ。

「はぁッ!!」

エクレールが飛び上がり、メイトリックスがレオンミシエリに向けて発砲する。

だがレオンミシエリは一枚上だった。

なんとセルクルから飛び降り、メイトリックスの攻撃を避けたのだ。

「しまった…!!」

メイトリックスは舌打ちするがもう遅い。

銃弾は全てエクレールに直撃し、彼女の剣が折れてしまったのだ。

更に空中でのバランスを崩したエクレールはそのまま地面に落下した。

ズシャアアアン!!!

派手に身体を打ちつけたようだが、エクレールは特に怪我をしていないようだ。

それどころかメイトリックスを睨みつけている。

「すまないエクレール、大丈夫か!？」

慌ててエクレールに駆け寄り、手を差し出すメイトリックス。

「ゆ…勇者!お前は何なんだ!?!戦いの邪魔をしにきたのか!?!」

「すまない。だが俺はあれほど…ん?」

二人が振り返ると、レオンミシエリが紋章を発動させていた。

「はあああ…!」

そして…

「獅子王炎陣…!」

その途端、地面から炎が噴き出し、空からも炎が降り注いだ。

「うわあ!」

「にゃああ!」

ビスコッティ、ガレット関係無しに、兵士達が巻き込まれていく。

だがこの二人は違った。

「うおおッ！」

「はあッ！」

爆風を潜り抜けた人影が二つ、メイトリックスとエクレールだ。

「奴の紋章術はタダ物ではないな…」

「レオ閣下のはケタが違う！倒されたくなければ…とにかく逃げろ
！！」

エクレールがそう言い、彼女とメイトリックスはバラバラに逃げた。

「…大爆破！！！」

ドガアアアアン！！！！

その技は、戦場の大半を覆い尽くした。

《爆破！！レオンミシエリ閣下の獅子王炎陣大爆破！！範囲内にいる限り、立っていられる者はいないという超絶威力の紋章砲！！》

フランボワーズの実況が戦場に響く。

《味方を巻き添えにしてしまうのがたまに傷ですが、それにしても
凄い！！》

「フランボワーズ、確認せい。勇者と垂れ耳はちゃんと死んだか！
」

レオンミシェリがフランボワーズに、モニター越しに問いかける。

《あ、はい。えーとですね…》

フランボワーズが確認しようとしたその時、空が光った。

「そう簡単に…死んでたまるかー！！！」

「…あいつ、ますます面白い奴だ」

なんと空から、エクレールがメイトリックスにしがみついた状態で
降りてきたのだ。

《そ…空ああ！？勇者と親衛隊長、無事です！！》

そう、すんでのところでエクレールが紋章術を発動させ、空へと飛
び上がったのだ。

《だがこれでは、レオ閣下の的だぞ！！》

その通り、レオンミシェリは二人を見上げてニヤリと笑っている。

「エクレール、よく聞け。俺が奴を気を引く。君は背後を狙うんだ、いいね？」

「ぐッ… 貴様に指図されるのは気に入らんが、今は協力だ！」

エクレールが頷くと同時に、メイトリックスは彼女から離れ、機関銃を構えた。

ドドドドドドドドドドド！

だがレオンミシエリは強靱な盾で銃弾を防いでおり、ニヤリと笑う。

「勇者、そのような飛び道具だけでワシにかなうと思ってか！？」

だがメイトリックスは、戦い方は彼女よりも長けていた。

「…試してみるか？俺だって元コマンドーだ！」

メイトリックスは機関銃を投げ捨て、カー杯レオンミシエリの盾を殴った。

バコオオオオン！！

なんとその盾は木端微塵になり、使い物にならなくなった。

「チッ、なかなかやるではないか、勇者！」

レオンミシェリは剣を振り上げるが、メイトリックスはその動きを読んでいた。

ガキーン！！

胸ポケットに装備したナイフを抜き、応戦するメイトリックス。

メイトリックスはナイフを、レオンミシェリが剣をぶつけ合う。

「そういえば勇者、お主ワシを最後に倒すとぬかしておったな？」

「ああ、あれは嘘だ」

そう言った時、エクレールがレオンミシェリの背後に迫ってきた。

「んなッ……！？」

エクレールに気付いたレオンミシェリだが、遅かった。

「はあああああ！！」

ズシャアアアン！！

メイトリックスとエクレールが同時に、ナイフと短剣をレオンミシェリに直撃させた。

だがそれと同時に、レオンミシェリのマントや装備も崩れ、彼女は露出度の高い服装になってしまった。

「んー…垂れ耳と飛び道具男相手と思って、少々侮ったか…このまま続けてやつてもよいが、それではちと両国民へのサービスが過ぎてしまうの…」

「レオ閣下、それでは…」

「ワシはここで降参じゃ」

レオンミシェリが小さな白旗をあげ、どこからか花火が上がった。

ピュ~~~~ッ…バンバン!!

《まさか…まさかのレオ閣下敗北！総大将撃破ボーナス、350点
が加算されます！今回の勝利条件は拠点制圧ですので戦終了にはなりません、このポイント差は致命的！ガレット側の勝利はほぼ無いでしょう!!》

「やったー!!」

「やったであります!!」

塔の上にて、リコッタがミルヒオーレに抱きついた。

二人とも、とても嬉しそうです。

（ありがとうございます…勇者ジョン様）

心の中で、ミルヒオーレはメイトリックスに礼を言った。

そしてこちらは戦場、メイトリックスとレオンミシェリが向き合っている。

「勇者よ、このワシの盾を拳で潰すとは中々の腕じゃのう」

「元上司のカービー將軍が優秀だったからな」

モニターには二人の姿が映っている。

「だが今後も同じ活躍が出来ると思うなよ？」

レオンミシェリはそれだけ言い、メイトリックスにマイクを渡した。

「ああ、楽しみにしておこう」

ふと前を見ると、レオンミシェリが尻尾でエクレールを指しているのに気が付いた。

（マイクを渡せというのか…？）

とりあえずメイトリックスは、エクレールにマイクを渡した時、レオンミシェリが口を開いた。

「撮影班、垂れ耳に寄れ。よい画が撮れるぞ」

その言葉に反応したカメラマンが、カメラをエクレールに向けた時だった。

シュパンッ！！

なんとエクレールの服の殆どが切り裂かれ、彼女は裸同然の姿となった。

「~~~~ッ！！」

実は先程メイトリックスが発砲した銃弾がエクレールの衣服に引っかけっており、今回のような珍事を招いたのだった。

（俺のせいかな…？）

「ははははは！また来るぞ！」

レオンミシエリは高笑いをあげ、背を向けた。

「今度はきっちり侵略してやろう！」

そう言い、彼女は退場していった。

「ああ、いい戦いだった」

メイトリックスが親指を立て、彼女を見送る。

だがこの後、彼はエクレールの逆襲に遭うのだが、それはまた別のお話。

ガレットはオシオキだっちゃ♪ (後編) (後書き)

ある程度まで進むと、オリジナルのシナリオで完結させようと思います。

OK？

（帰れないなんて）そんな…嘘だアァッ！！！！（前書き）

OKをいただいたので途中からオリジナル展開にします！

（帰れないなんて）そんな…嘘だアァッ！！！！

戦はビスコッティ側の勝利に終わった。

騎士団長のロランは記者達に囲まれ、インタビューを受けている。

「ありがとうございます！団長、今回華麗に活躍してくださった勇者さんにもお話を伺いたいのですが…」

「いや…それはご遠慮願いたい。勇者殿は今死ぬほど疲れていらっしやるので、お話は後々ということで」

木陰ではメイトリックスが休憩をとっていた。

前回の戦で彼に恥をかかされてしまったエクレールの逆襲を受け、言葉通り死ぬほど疲れたのだ。

「…大丈夫か勇者？」

エクレールが水の入ったコップを持ってきた。

「ああ、すまない」

「いや…私もやりすぎた」

「それよりも、そろそろ帰りたいからお姫様に挨拶させてくれ」

それを聞いたエクレールはキョトンとした。

「…勇者、貴様は帰れないぞ？」

「…どうしてだ？」

「あーもう！こっちへ来い！ここだと目立つ！」

エクレールに引っ張られる形で、メイトリックスは戦場を後にした。

*

「…二度と帰れないだと！？」

二人はその足で町まで来ていた。

途中で合流した犬、タツマキもいる。

「まったく…覚悟も無いのに召還に応じるからだ」

「覚悟も何もいきなりその犬が…崖から落ちたのを助けてくれたことは感謝するが…」

するとそれに答えるように、タツマキは地面に小さな紋章を発動させた。

そこにはこう書かれていた。

《ようこそフロニヤルドへ。おいでませビスコッティへ。注意：これは勇者召還です。召還されると帰れません。拒否する場合はこの紋章を踏まないでください》

「小さくて読めん…今度余計な召還をすると紋章を縫い合わすぞ！」

「知るか！私に言っな！」

肩をガクツと落とすメイトリックス。

「16日後、ジェニーが帰ってくるのに…」

「ジェニー？…まあ貴様を返す方法は今学院組が調査中だ。時期に判明するさ」

そう言ったエクレールは、メイトリックスに大きめの袋を手渡した。

「これは…金か？」

「ああ、戦場での活躍報奨金だ。お前は仮にも勇者だから、それなりにあると思うがな」

このような大金をポンとくれるビスコッティを、メイトリックスは気前のいい国だと思った。

それからメイトリックスは、エクレールに案内される形で町を廻っていた。

報奨金や戦のシステム、フロニヤ力の偉大さや魔物の恐ろしさなどを教わった。

そんな中、メイトリックスはある店を見つけた。

「エクレール、ここで待ってる」

「どうしたんだ？」

「いいから待っていてくれ」

そう言った彼はその店へ向かっていった。

数分後、

「…ほら」

メイトリックスはエクレールに、ソフトクリームを手渡した。

「え…わ、私に…？」

「ああ、俺の面倒を見てくれた礼だ」

だがエクレールはそっぽを向いた。

「ふ、ふん！勇者に恵んでもらうほど私は落ちぶれてなどない！」

「早く食わないと溶けるぞ?」

メイトリックスがニヤツとする。

「…う、受け取ればいいのだろう!」

エクレールは頬を赤らめながらソフトクリームを受け取り、口をつけた。

「はははっ!」

「…うう…おいしい…」

ボソツと彼女はそう呟いた。

*

数十分後、二人は町を後にし、リコッタの所へ向かっていた。

元の世界へ帰る手段が見つかったかもしれないと考えたためである。

だが現実はそう甘くはなかった。

「申し訳無いであります!このリコッタ・エルマール、誠心誠意、

勇者様がご帰還される方法を探していましたが…力及ばず、
今や何とも、どうにもこうにも…」

リコッタはメイトリックスに対しペコペコしている。

やはり何も収穫は無かったようだ。

「いやリコ落ち着け。私も勇者もそんなに早く見つかるとは思って
いない」

「ああ、そうだ」

二人がりコッタを慰める。

「そういえば勇者、期限について何か言ってたな。いつまでだ？」

「16日後だ。娘がその日、外国から帰ってくるんでな」

それを聞いたリコッタの表情がパアツと明るくなった。

「16日！？それなら大丈夫であります！希望が湧いてきたであります！」

「ああ、よろしく頼む」

そう言ったメイトリックスはりコッタの頭を撫でた。

その時、リコッタがあることに気がついた。

「あれ…エクレ、口に何かついてるでありますよ？」

リコッタがエクレールの口元を指さす。

「ああ、さっきのアイスか。はは、口元はちゃんと拭いておけよ」

メイトリックスがハンカチを渡しながら笑う。

「な…ゆ、勇者！貴様あ！！」

エクレールの顔は一気に赤くなった。

「アイスう！？エクレ、なんて羨ましいのでありますか！」

リコッタが羨ましそうな表情でエクレールを見つめる。

「ははは、リコッタにも今度奢ってやるさ。お姫様に聞いたところ、あの機関銃の設計を担当したのは君なんだろう？とても使い勝手が良かった。俺が軍隊で使っていたものとそっくりだった」

「あ、ありがとうございます！！」

リコッタは目を輝かせ、メイトリックスに頭を下げた。

（この子はシンディ以上に機械に強くなるな…）

彼はリコッタを見てそう思った。

*

数時間後、メイトリックスは早めに城へ戻り、風呂から上がった。
ちなみに夕方である。

（そういえば今日はお姫様のコンサートだったな…）

服を着替え、ベンチで雑誌を読んでいるところだ。

「あ、勇者様！」

声をかけられ、メイトリックスは顔をあげると、そこにはミルヒオーレがいた。

「お姫様か。コンサート楽しみにしているぞ」

「あ…ありがとうございます！」

ミルヒオーレは目を輝かせる。

「ところでお姫様、なんでこの雑誌は『ビスコッティマガジン』なんだ？『フロニヤマガジン』の方がつきりするのに」

「ふふ、勇者様って意外と古いんですね」

フフッと笑うミルヒオーレ。

「はは…まあとにかく、コンサート頑張ってくれ」

「はい！では失礼します！」

メイトリックスに一礼したミルヒオーレは浴場へと向かっていった。

これから、一悶着あることも知らずに…。

（帰れないなんて）そんな…嘘だアッ！…！！（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしています！

何が始まるんです？（前書き）

姫様奪還戦だ！

何が始まるんです？

ミルヒオーレが立ち去ってから数十分が過ぎた。

「…さて、そろそろ用意をするか」

雑誌を読み終えたメイトリックスがベンチから立ち上がった、その時だった。

「きゃああああッ！！」

なんとミルヒオーレが向かって行った方向とは別の所から、彼女の悲鳴が聞こえてきたのだ。

（な、なんだ！？）

メイトリックスは雑誌を投げ捨て、悲鳴の聞こえた所へ走っていった。

*

そこは外で、裏庭のような場所だった。

「…！！」

何かの気配を感じ取ったメイトリックスは、門の上を見上げた。

そこには三人の少女の姿があった。

真ん中の黒髪の少女が、ミルヒオーレを抱えている。

「我らがレット獅子団領！」

ウサギ耳の少女がポーズをとり、叫ぶ。

「ガウ様直属親衛隊！」

関西弁のような口調で叫ぶ少女。

「『ジエノワーズ！』『』」

三人が名乗る。三人一組でジエノワーズのようだ。

「お姫様！」

メイトリックスも叫ぶ。

「ビスコッティの勇者殿、貴方の大事な姫様は我々がさらわさせていただきます」

黒髪の少女が無表情でメイトリックスに呼びかける。

その光景は生中継として流されていた。

「ウチらはミオン砦で待つてるからな！」

「姫様がコンサートで歌われる時間まであと一刻半。無事助けに来られますか？」

「つまり大陸協定に沿って、要人誘拐奪還戦を開催させていただきます。こちらの兵力は200、ガウル様は勇者様との一騎打ちをご希望です」

「勇者さんが断ったら姫様がどうなるか…」

対するメイトリックスは、彼女らを見上げていた。

「…よくわからんが、いいだろう。受けて立とうじゃないか」

*

《さあ！昼間の熱気も冷めぬうちに何だか大変なことになってまいりました！なんとビスコッティの代表にして姫君、ミルヒオーレ姫がさらわれるという大変な事態！私、フランボワーズも大急ぎで現地向かっております！》

（うるさいな…）

実況の中継を喧しく感じたが、今はそれどころではない。

メイトリックスがジェノワーズを追いかけてきた時、エクレー
ルが走ってきた。

「こんの…ド阿呆があああッ！！」

エクレールがとび蹴りをかますが、メイトリックスはすんなりそれ
を避けた。

「いきなりなにをする？」

「それはこっちの台詞だ！勝手に宣戦布告を受けるとはどういうつ
もりだ！？」

なんとか着地したエクレールはメイトリックスを怒鳴りつける。

「宣戦布告だと？なんだそれは？」

何も知らない様子のメイトリックスに、エクレールは更に腹が立つ
てきた。

「…ええい、喧しい！！とにかく用意をしろ！！」

そう言ったエクレールの後ろには、メイトリックスの武器を運んで
きたリコッタの姿があった。

*

数分後、メイトリックス、エクレール、リコッタの三人はセルクル

に乗り、ミオン砦目指して走っていた。

「宣戦布告を受ければ公式の戦と認めたことになる。普段の戦闘ならいざ知らず、姫様をよりによってこのタイミングで！コンサート
の姫様の出番まで、あと一刻半しかないんだぞ！」

「エクレ、あんまり怒ると血管切れるでありますよ？」

リコッタがエクレールを宥める。

「二人とも、勝手な真似をしてすまない」

その時、先程から黙っていたメイトリックスが口を開いた。

「俺の世界では、一国の姫が誘拐されるというのは一大事なんだ。
俺もその奪還任務に就いたことがある」

「そういえば勇者様、かつては…こまんだー、でしたっけ？」

リコッタが思い出そうとするが、残念ながら間違いだ。

「コマンドーだ。俺はその責任を取らなければならない。お姫様を
助け出すし、コンサートにも間に合わせる」

「当然だ！」

「自分も微力ながら頑張るでありますよ！」

そう言った三人のセルクルは疾走する。

近くの崖の上にて、それを見ている人影に気付くことなく…

*

一方その頃、ミオン砦の外では沢山のガレット兵士達が守りを固めている。

正面突破は不可能だ。

「ふあ…」

一人のガレット兵が欠伸した時、奴はやってきた。

ヒュルル…！

ドガアアアン…！！

リコッタがメイトリックスの証言を基に開発した、ロケットランチャー（非殺傷）の弾だ。

それは彼らが立っていた場所そのものを吹き飛ばし、彼らをねこ玉に変化させた。

「な…ゆ、勇者と垂れ耳だ！」

難を逃れたガレット兵が指さして叫ぶ。

正面には、セルクルに乗りながらロケットランチャーを構えるメイトリックスと、それを支えるエクレールの姿があった。

「クソッ、怯むな！敵は正面だ！やれえ！！」

指揮官らしき男がそう叫んだ時、上空から無数の光の玉が飛んできた。

ドガアアアーン！！

それは、先程のメイトリックスの攻撃を逃れた者全員に命中した。

「リコッタめ…なかなかやるじゃないか」

それを見たメイトリックスは感心する。

「リコは戦場では砲術士を担当している。この程度は当然だ。それより突破口は開けた、行くぞ！！」

「ああ！！」

二人はセルクルから飛び降り、一気に門の中へと駆け込んだ。

門の中にはさらに大勢の兵隊が待ち構えていた。

「エクレール！俺の後ろへ！」

「わ、わかった！」

エクレールがメイトリックスの後ろに隠れると同時に、彼は再び口
ケットランチャーを放った。

ドガアアアン！！

「うわああああ！！！」

「ぎゃああああ！！！」

大半のガレット兵が吹き飛び、メイトリックスは弾切れになった口
ケットランチャーを捨てた。

「ふははははは！！！」

その時、何処からか男の低い声が聞こえてきた。

メイトリックスとエクレールがその方を向くと、長髪で大柄な男が
立っていた。

「親衛隊長も勇者もなかなかやるではないか！」

「ゴドウィン將軍か……！」

エクレールが舌打ちする。

「そういえばエクレール、リコッタの砲撃が止まっているが…」

「恐らく別動隊が居たのだろう。無理もない…」

どうやらリコッタは敵に見つかり、行動不能になってしまったようだ。

「勇者ジョンとやら。我らが主、ガウル殿下がご指名だ。広場まで来てもらおう！」

（ガウルだと…？そういえばさっきのおかしな娘達がそいつの名を…）

「小娘の親衛隊長には用は無い。降参するなら許してやるぞ、ん？」

ゴドウインの威圧感に圧倒されるエクレールだが…

「…断る！…！」

「そうか、なら…」

ゴドウインは手に持っている、鎖で繋がれた鉄球が付いた大斧を振り上げた。

「少々痛い目を見てもらおう！…！」

そう叫び、ゴドウインがエクレール目掛けて鉄球を放った。

ガキイツ!!

だがメイトリックスがエクレールの前に出て、なんと左腕で鉄球を受け止めたのだ。

「な…なにイ!?!」

目を見開くゴドウィン。

当たり前である。このような人間離れしたこと、普通なら出来ない。

だがそれを平然とやってのけてしまう、それがこのジョン・メイトリックスなのだ。

「ぐッ…!」

「勇者…!」

さすがにダメージはあったようであり、左手を押さえこむメイトリックス。

「ぬははははは! そのような無謀な事するからよ!」

「だがこれは左手だ…利き腕じゃないんだぜ!」

そう、メイトリックスが使ったのは弱い方の腕だったのだ。

「舐めやがって……貴様らの戦力は実質、筋肉勇者のみ！この俺様と百人のガレット兵士団と対等に戦えると思うなら……」

再びゴドウィンが鉄球を振り上げた。

「やってみやがねえええええ!!！」

何が始まるんです？（後書き）

やっぱコマンドーで知名度低いんですかね？w

作者の周り誰も知らない…

オンミツのプリオッシュだぁ。激ツヨだえゝゝへへっ。(前書き)

作者の好きなキャラはミルヒ姫とユキカゼです。

オンミツのブリオツシュだぁ。激ツヨだえゝ、へへっ。

ゴドウィンが鉄球を振り上げた、その時だった。

シュン！

桃色に輝く何かが回転しながら、ゴドウィンに迫ってきた。

「はぁッ！」

突然の事態に驚きつつも、ゴドウィンは斧でそれを弾き返した。

弾かれたそれは空高く舞い上がり、エクレールの後ろの地面に刺さった。

その正体は剣だった。

「こ…この刀は…！」

エクレールはそれに見覚えがあるようだ。

「突然失礼した！」

一同が声のした方を向くと、背の高い女が建物の上に立っていた。

「ほう…久しぶりでござるな、エクレール。しばらく見ないうちに大きくなった」

「ダルキアン卿!!」

エクレールが目を輝かせる。

「ダルキアンだと!?!」

ゴドウィンが、ダルキアンと呼ばれたその女を睨みつける。

「エクレールの知り合いか?」

メイトリックスも彼女に目を向ける。

「いかにも。その斧將軍と勇者殿には、お初にお目にかかる」

そう言ったダルキアンはマントと帽子を脱ぎ捨てた。

「拙者はビスコッティ騎士団自由騎士、オンミツ部隊の頭領…ブリオッシュ・ダルキアン!」

（あれがブリオッシュ・ダルキアンか…）

ここに来る途中、メイトリックスはエクレールから彼女の事を聞いていた。

「騎士団長ロラン殿からの要請で助太刀に参った!!」

だがダルキアンの後ろで何かが光った。

そう、何人ものガレット兵が弓を構えていたのだ。

「野郎!!」

メイトリックスはそう叫び、予備のロケットランチャーを発砲した。

ドオオオオオン!!

「わああああ!!」

ドガアアアアン!!

銃弾は彼らが隠れていた塔に直撃し、それを崩れ落とした。

「いやゝゝ素晴らしいでござるよ勇者殿、おかげで助かった。さて、押し掛け助っ人の推参である。さあ、いざ勝負でござる!!」

その時、ダルキアンの背後にて三つの花火が上がった。

「おお…ユキカゼの方も完了したようだな」

そう呟いたダルキアンは建物から飛び降り、ガレット兵達に斬りかかった。

「はぁッ！」

シャッ！

「うわぁッ！！！」

ボンッ！！

斬られた兵士達は次々とねこ玉化していく。

その時、上空に二つの人影が現れた。

リコッタと、彼女を助け出したオンミツ部隊の筆頭：ユキカゼ・パネトーネである。

二人は何やら紋章を発動させ、沢山の火薬をばら撒いた。

ドガアアアン！！

ドガアアアン！！

「「うわああああああ！！」」

ガレット兵達がパニックに陥った隙に、メイトリックスとエクレー
ルは走り出した。

「ダルキアンとやら、俺達はお姫様を助けに砦の中に突入する！後
を頼むぞ！」

「存分につとめてくるでござる。ここは拙者とユキカゼに……」

「ああ、ありがとう！」

ダルキアンに礼を言ったメイトリックスは、砦の中に突入していっ
た。

「……任せるでござるよー！」

一人残ったダルキアンは、ゴドウィンと対峙した。

*

砦に突入したメイトリックスはエクレールと分かれ、先に進んでい

た。

「邪魔な扉だな…」

そう呟いたメイトリックスはロケットランチャーを構え、引き金を引いた。

ドガアアアン！！

ロケットランチャー最後の弾を使い、メイトリックスは扉を破壊して先に進んだ。

そこは広間だった。

「よお！」

正面から少年の声が聞こえてきたが、姿が見えない。

「てめえがビスコッティの勇者だな？俺はガレットの…」

だがメイトリックスは話も聞かずナイフを抜き、正面へと駆け出した。

やがて銀髪の少年の姿が確認できた。

「はっ！聞く耳ねえってかあ？」

「ああ、そうだ！」

彼の持っている槍とメイトリックスのナイフがぶつかり合う。

「悪いが急いでいるんでな、通してくれ」

「ははっ、いいぜ…やれるもんならなあ!!」

そして二人は互いに距離をとった時、二人の武器が折れてしまった。

「へへっ、いいねえ…充分客を呼べる腕前だ」

そう言った少年はニヤリと笑う。

「なあ勇者、もっと派手な技はないのか？俺らの戦は見せてなんぼの代物だ」

「お前は何なんだ？早く通せ！俺は急いでいるんだ！」

流石にイライラしてきたのか、メイトリックスの声のトーンが大きくなっている。

「はっ！さっきは聞く暇もなかったんじゃないのか？」

そう言った少年は折れた槍を捨てた。

スチャッ！

即座にメイトリックスは背負っていたライフルを構え、少年に向けた。

「いッ!？」

銃を見た少年の動きが一瞬止まる。

「ま…まあ落ち着けよ!そんな飛び道具見せられちゃ話もできねえからな」

そう言われ、メイトリックスはライフルを下ろした。

「俺の名はガウル・ガレット・デ・ロワ。昼間アンタと戦ったレオンミシェリの弟さ」

「弟だと？」

「ああ、別に姉上の敵討ちってワケじゃねえ。アンタと手合わせしなかったんだよ」

ガウルはそう言うと、新しい槍を取り出した。

「どうしてもここを通りたければ、この俺を倒していくんだな。OK?」

「OK!」

ズドン！！

そう言うや否や、メイトリックスはガウルに向けて発砲した。

オンミツのブリオッシュだぁ。激ツヨだえゝ、へへっ。(後書き)

ちなみにメイトリックスが戦で使う銃器は全て非殺傷です。

急げ、この勇者が！急げってんだよー！（前書き）

この手に限る！

急げ、この勇者が！急げってんだよ！！

「うおおッ！？」

ガウルはなんとか、メイトリックスの銃弾を避けていた。

「な、何が「OK！」だよ！危ねえだろうが！！」

「通りたければ倒せと言ったのはお前だろう？」

相変わらず、メイトリックスは涼しげな顔でライフルを構えている。

「う…うるせえ！！くたばれクソツタレがあッ！！」

槍を振り上げるガウルだが、メイトリックスはその動きを読んでいた。

ズドン！！

バキィッ！！

一発の銃弾で、槍の先端部分を吹き飛ばしていた。

「あ…え…？」

啞然とするガウルに、メイトリックスは言い放った。

「くたばんのはお前だ」

ズドン！！

「うおわッ！」

ズドン！！

「アブねえ…！」

ズドン！！

「だろぅがぁあぁッ！！」

何度か身体をかすったものの、銃弾を避けたガウルはメイトリックスの正面までやってきた。

「てめえ…一体何なんだ！？何のために勝負を急いでやがる！？」

するとメイトリックスはため息をついた。

「はあ……これからお姫様のコンサートがある。その前におかしな娘達三人が、お姫様を誘拐してここまで連れてきた。俺達は彼女を取り戻しに来ただけだ」

「な…なにイツ!？」

メイトリックスから説明を受けたガウルは驚愕の表情を浮かべる。

「…てか、この後コンサートってマジか!？」

「何度もそう言っているだろう」

実際には一度しか言っていないが。

「チッ…あんのジェノワーズのアホ共が…また適当な仕事しやがったな…!」

「何を言っているんだ?早くお姫様の所へ案内しろ!」

そう言い、メイトリックスがガウルの襟首を掴んだ時だった。

ドガアアアン!!!

突如、二人が立っているところの壁が破壊され、辺りに砂煙が立ち込めた。

「「!?!」」

やがて煙が晴れ、現れたのはジェノワーズ三人に制裁を与えたレオンミシエリだった。

「ガウルう…それにビスコッティの筋肉勇者あ…！」

レオンミシエリは二人を睨みつける。

「あ、姉上…！」

「……」

「このオ…バカ者どもがああああ…！戦場で何を遊んでおるかあああああ…！」

彼女は息を吸い込み、怒鳴りつけた。

「う…ごめんなさい…！」

ガウルは頭を下げるが、メイトリックスは平然としている。

「いや、少なくとも俺は遊んでなどいない。いたって真剣だ」

「やかましい…！とにかくそこまでだ…！ついてこい…！」

そう言ったレオンミシエリは、メイトリックスとガウルを連れて歩き出した。

「レオ様申し訳ございません…！こんなこととはつゆ知らず…」

メイドのルーシュがレオンミシエリに頭を下げる。

「よい。悪いのはその馬鹿共だ」

ガウルは借りてきた猫のように大人しくなり、メイトリックスは安堵のため息を漏らした。

やがてレオンミシエリはひとつの部屋の前までやってきた。

「邪魔するぞ」

そう言い、開けた扉の先には…

「レオ様？」

さらわれたミルヒオーレがいた。特に怪我は無いようだ。

「すまなかった、ミルヒオーレ姫殿下。戦勝国の宴の邪魔など無粋な真似を…お主の都合を無視して連れ出した弟に代わって詫びる」

その途端、ガウルがさらに頭を下げた。

「いえ…あの…ガウル殿下はご存じなかった…」

「今回のことは何か別の形で詫びを考える。今は早く戻るとよからう」

ミルヒオーレに背を向け、詫びるレオンミシエリ。

「レオ様…」

「ルージュ、後は頼んだ」

「は、はい！」

ルージュに後を任せ、レオンミシエリは部屋を後にした。

「ああッ！やっぱ間に合わねえか!？」

ガウル、ミルヒオーレ、エクレールの三人がコンサート会場の様子をモニターで確認している。

「姫様の出番まではあと二十分…ここからホールまではどう急いでも一時間は…」

エクレールが表情を曇らせる。

「くそお…なんてこった!!なんてこった!!」

自分達の仕出かしたことの愚かさに気付いたのか、ガウルが地団太を踏む。

「あ、あの…本当にお気になさらず…」

ミルヒオーレはそんなガウルを宥める。

「……」

メイトリックスも壁にもたれ、早く戻る方法を考えている。

（くそっ…何かないのか…？）

そして不意に窓の外に目をやった時。彼はあることに気がついた。

「ッ！あれは…！」

メイトリックスは窓を開け、確信した。

「よし！早く帰れるぞ！」

その場にいた者全てがメイトリックスの方を見る。

「お姫様、俺が送ろう」

それを聞いた全員が驚いた。気絶しているフリをしているジェノワーズ達も含めて。

「送ってくつてお前…」

「どうやって？」

「ついてこい。そうすればわかる」

そう言い、メイトリックスは部屋を飛び出した。

*

「…何ですか？これは…」

外に出たミルヒオーレが、あるものを見て首を傾げる。

「ただの鉄の箱にしか見えんが…」

エクレールが呟く。

「なあ勇者、何なんだよこれは？」

ガウルがメイトリックスに尋ねる。

「これは俺の居た世界での移動手段、自動車だ。車種は…キャデラックだな」

そう、このキャデラックはコマンドー本編の序盤で、アリアスの部下であるクックが、かつてのメイトリックスの部下、フォレストルの勤務先のディーラーから強奪したものだった。

「何故ここにあるのかはわかんが、鍵もガソリンもある。これで帰れるぞ。お姫様、乗ってくれ」

「は…はい！」

頷いたミルヒオーレは、助手席に乗り込んだ。

「これを…締めないとな」

メイトリックスはミルヒオーレのシートベルトを締め、自分も運転席に乗り込んだ。

「では俺達は先に行く!」

ブロロロロ…!

鍵を回し、エンジンをかけたメイトリックスはアクセルを踏んだ。

ブオオオオオオオン!!

二人を乗せたキャデラックは、猛スピードでその場から走り去っていった。

*

「ほうほう…そうでござったか…」

城の外では、ダルキアンがねこ玉達と何やら話していた。

ゴオオオ…!

聞き慣れない音がし、ダルキアンが横を向くと、メイトリックスの
運転するキャデラックが走ってきていた。

「勇者殿に姫様！」

メイトリックスとミルヒオーレを確認したダルキアンだが、キャデ
ラックは猛スピードで駆け抜けていった。

「お姫様を送ってくる！色々と世話になった！」

「行つてきまゝす！」

二人はダルキアンに挨拶し終わるときには、キャデラックの姿は見
えなくなっていた。

*

「忍！」

その頃メイトリックス達は、キャデラックと同じスピードで走る少
女と遭遇していた。

「姫様、お久しゅうございます！」

「ユキカゼ！」

そう、ユキカゼだ。

「はい、勇者殿にはお初にごさる。ビスコッティ騎士団オンミツ隊筆頭、ユキカゼ・パネトーネと申します！」

「ああ、俺はジョン・メイトリックス。活躍は見させてもらった」とするとユキカゼは笑顔を見せた。

「ありがとうでござる！今度拙者もそれに乗せてもらいたいでござる！」

「いいぞ。だが今は少し急ぐんでな。失礼！」

ブオオオオオオ！！

そう言ったメイトリックスは思い切りアクセルを踏み、速度を上げた。

キャデラックはたちまちユキカゼを追い抜き、姿を消してしまった。

*

十分後、二人は無事にフィリアンノ城に到着した。

ミルヒオーレはメイド隊に連れられ、コンサートの準備に向かった。

やがてしばらくし、スピーカーからミルヒオーレの歌声が聴こえてきた。

メイトリックスも休憩所の椅子にもたれながらそれに耳を傾けている。

「これは…いい歌だ…」

「でしょう?」

メイトリックスの正面には、メイド隊隊長のリゼルが立っていた。

「お疲れ様です」

「ありがとう。皆が楽しみにする理由がわかった。このような歌なら、俺の居た世界でかなりの人気が出ただろう」

「勇者様の世界ではどのような歌が…?」

リゼルが首を傾げる。

「そうだな…俺が子供の時、西ドイツという国にロックが入ってきたんだが、破壊的だって評判悪かったんだ。それに比べて、お姫様の歌は優しい…まるで天使の歌声だ」

「天使…ふふっ、そうですね」

メイトリックスは目を閉じ、ミルヒオーレの歌を聴くことに専念した。

急げ、この勇者が！急げってんだよ！！（後書き）

何故キャラクターがフロニヤルドに現れたのかは、後々明らかになります。

ご意見、ご感想お待ちしております！

(改造度を)採点してやろう、百点だよ(前書き)

タイトルこれしか浮かばなかった…

今回はいつもより短めです。

（改造度を）採点してやろう、百点だよ

メイトリックスがフロニャルドにやってきて数日が経過した。

彼の過ごし方は、元の世界と特に大差は無い。

今朝も、メイトリックスは騎士団に混じって訓練に励んでいた。

「さ、流石勇者だ…」

他の兵士達が啞然とする。

それもそのはず、メイトリックスは十人の兵士と模擬戦を行っていたのだが、あっという間に彼らを無力化したのだ。

「やはり…すごい逸材だな…」

騎士団長のロランが呟く。

これは自分以上、もしくはビスコッティ最強かもしれないとさえ思っていた。

「…ん？」

そんな中、ロランはリコッタの姿を見つけた。

彼女は山盛りの料理皿を乗せたカートを押していたので、かなり目立つ存在だ。

「主席、自ら差し入れとはすまないな」

「いえ！それより、勇者様はどうでありますか？」

リコッタの視線の先には、利き腕でない左腕で腕立てするメイトリックスの姿があった。

「ああ、彼はとても素晴らしいよ。そろそろ休憩にするか…」

そう呟いたロランは、訓練中の兵士達に呼び掛けた。

「みんな。厨房からの差し入れだ、一息入れよう！」

「「はい！！」」

*

（休憩するか…やりすぎると死ぬほど疲れるからな）

腕立てをやめ、立ち上がったメイトリックスの前にエクレールが立ちはだかった。

「勇者、休憩の前に稽古に付き合ってほしい。いいか？」

「俺は別にかまわんが…」

この会話を聞いていたロランが早速食いついた。

「それはいい！また相手をしてやってくれ、勇者殿！」

そしてロランは部下達の方を向いた。

「みんな、よく見ておけよ。勇者殿と親衛隊長の戦いを！」

「はい！！」

彼らを余所に、メイトリックスは剣をエクレールに手渡した。

「勇者、貴様の武器はどうするんだ？」

そう、メイトリックスは素手だ。

「今回俺は武器は使わない。以前の結果を見ればわかるだろう」

実はここ数日での二人の模擬戦、エクレールの全敗なのだ。

「ふ…ふざけるな！貴様が武器を持たんのなら、私は戦わん！！」

エクレールはメイトリックスの態度が気に入らず、背を向けた。

するとメイトリックスは息を吸い込み、彼女を見定めた。

「…来いよエクレール、意地なんか捨ててかかってこい！」

エクレールは不機嫌そうな表情を浮かべ、振り返った。

「意地…だと？」

「そうだ、お前はお互いに同じ武器を持った状態で戦いたいんだろ
う?。」

だが結果は見えている。

なのでメイトリックスはあえて武器を持たずに稽古を続ける気なのだ。

「一度は勝ちたいはずだ。俺は武器無しで、尚且つ訓練で少し消耗している。本気を出せば、お前でも勝てる」

「……」

エクレールは奥歯を噛み締め、メイトリックスを睨みつける。

「来いよエクレール、怖いのか?」

「…誰が貴様なんか…貴様なんか怖くない!!」

あっさり挑発に乗ったエクレールは剣を構え、叫んだ。

「覚悟しろ勇者あああ!!」

「…まったく、何故か勇者殿にだけはムキになりやすいな、親衛隊長は」

「あの人らしいですね」

他の兵士たちは、メイトリックスが相手を挑発するのに熟れていることに薄々気付いていた。

*

「はあ…はあ…この状態で敗北するとは…我ながら情けない」

結局、挑発に乗ったエクレールの集中力が切れ、メイトリックスに剣を叩き折られる形で稽古は終了した。

「まったく、最近どうしたというんだ？」

メイトリックスは少し息を切らせながら問う。

「うるさい！」

そう言ったエクレールは、コップに入った水を一気に飲みする。

「いつもこうなんだ。俺は何か怒らせることを言ってしまったのか？」

座り込んだメイトリックスはリコッタと顔を見合わせる。

「いいえ勇者様、エクレは素直になれないだけです」

「リコ！余計なこと言っな！」

エクレールはイライラしながら、タルトを口に放り込んだ。

「では俺はそろそろ失礼する。ダルキアンとユキカゼに呼び出されたのでな」

メイトリックスは水を飲んで立ち上がった。

「あ、待ってください勇者様！」

慌ててメイトリックスを呼び止めるリコッタ。

どうやら彼に話があるようだ。

「どうかしたのか？」

「こないだ勇者様が使ってた、じどうしゃ…でありましたっけ？それを改造しておいたであります！」

それを聞いたメイトリックスは驚き、彼女を振り返った。

「改造？どういうことだ？」

「強度でありますよ！剣や弓矢に銃、紋章砲だってへっちゃらであります！」

このフロニヤルドにはガソリンが無いため、このような改造しかできなかったようだ。

「ですがこのリコッタ・エルマール、必ずや…がそりんという燃料を開発してみせるであります！」

「そうか…そんな年で大したものだ。君は凄いな」

すっかり感心したメイトリックスはリコッタの頭を撫で、その場を後にした。

(改造度を) 採点してやるっ、百点だよ(後書き)

7 / 3 放送のトゥルライズ面白かった！

どこのバカだ、ユッキーペロペロとか言ったのは（前書き）

お分かりかと思いますが、タイトルの元ネタはイレイザーの「どこ
のバカだ、ピザ頼んだのは」です。

ちなみに今回も短めです、すいません。

「どのバカだ、ユッキーペロペロとか言ったのは

フィリアンノ城を後にしたメイトリックスは、セルクルに乗ってある場所へ向かっていた。

やがてしばらくすると、日本風の住居とその門が見えてきた。

「あ、勇者殿！」

門の前で、浴衣姿のユキカゼがメイトリックスの姿を見つけ、手を振る。

「ユキカゼか、お邪魔するよ」

門の中に入ったメイトリックスはセルクルから降りた。

「お館様のところに案内するでござる」

「ああ、頼む」

そうして二人は並んで歩きだした。

*

「おお、勇者殿か！」

ダルキアンは岩場に腰掛け、川で釣りをしていた。

彼女はメイトリックスとユキカゼに気がついて声をかけた。

「やあダルキアン、釣りか？」

メイトリックスは片手を挙げて挨拶する。

「今日は釣り日和でござるからな」

ユキカゼは二人から少し離れ、火をおこす準備に入った。

メイトリックスもダルキアンの隣に座り込み、持っていた釣り竿を取り出した。

すぐに餌をつけ、釣り糸を垂らす。

「ほお、手際がいいでござるな」

ダルキアンが彼を見てそう言う。

「俺は元の世界では、自給自足の生活をしているんだ。釣りだけじゃないがな」

「他には何をしているのでござるか？」

メイトリックスはダルキアンに、丸太を一人で運んだり、薪割りや野生の鹿に餌付けしていることを話した。

「…それは楽しそうでござるな、拙者も勇者殿のご自宅にお邪魔したいでござる。ところで、勇者殿には驚かされるでござるな」

「何のことだ？」

突然驚かれたことに、少し戸惑うメイトリックス。

「聞けばビスコッティに来てまだ数日、なのに騎士団やリコ達を心を許しておる」

だがメイトリックスは首を横に振る。

「いや、どうやらそうではないらしい。エクレールだけは何故か俺に対して突っかかってくるんだ」

するとダルキアンはプツと吹き出した。

「それは気を許している証でござろう」

ダルキアンがそこまで言った時、メイトリックスの竿に獲物がかかったようだ。

「お、当たりではござらぬか？」

「そのようだ」

メイトリックスは立ち上がり、竿を思い切り振り上げた。

ザバアアアア…！！

やがて魚が姿を現した。

それはかなりの大物で、ユキカゼが調理している他の魚の十倍はある。

釣りあげられた大魚はその調理中のユキカゼの正面で暴れていた。

喋れたら多分、「こんな安物の竿で俺を釣りやがって！」と喚いているだろう。

「そいつの調理も頼むでござるよ！」

大魚の叫びを知ってか知らずか、ダルキアンがユキカゼにそう言う。

「心得てございます！」

*

数十分後、大魚は丸焼きと化していた。

「勇者殿、いつかは故郷に戻ってしまってくださいるか？」

ユキカゼが焼き野菜を頬張りながら、メイトリックスに問う。

「それともこちらに永住を？」

メイトリックスは少し俯き、やがて顔を上げた。

「いや、永住するつもりはない。もうすぐジェニーが帰ってくるんでな」

するとユキカゼが、ジェニーという言葉に反応した。

「そのジェニー殿とは、どなたでござるか？」

「俺の娘だ。今は外国に留学しているんだが、長期の休みで帰ってくるようになったのでな。年齢はガレットのレオンミシエリと同年だ」

そうしてしばらくの間、三人は話に花を咲かせた。

*

夜になり、三人はビスコッティへと戻った。

「拙者達は騎士団本部に顔を出すでござる。そういえば勇者殿は、姫様とご会見でござるな」

「ああ」

実は先程、ミルヒオーレがメイトリックスに対し、夜に会いたいと希望を出したのだ。

そしてその知らせが、タツマキによって届けられたのだ。

「姫様に失礼の無いようにするでござるよ」

「それについては問題ない」

そう言ったメイトリックスは、ダルキアンとユキカゼに手を振りながらフィリアンノ城へと戻って行った。

*

「……なんだこれは」

メイトリックスが大浴場へ入った途端、彼はミルヒオーレ直属のメイド隊に囲まれてしまったのだ。

「それでは姫様直属メイド隊、勇者様の徹底洗浄！」

隊長のリゼルが叫ぶ。

「始め！」

あっという間に、メイド隊にブラシを擦りつけられる等、もみくちゃにされるメイトリックス。

「離れろ！自分の身体くらい自分で洗える！」

抵抗するメイトリックスだが、相手が全員女性なので振り払おうにも振り払えない。

「や、やめろ！男湯には女は入ってこれんぞ！」

「やめません。一日中遊びまわって、汗だくの状態で姫様の御前に出るなんて…このリゼル・コンキリエがメイド長の誇りにかけて許しません」

「ハメやがったな！このクソツタレエ！嘘つきみい！」

押し寄せるメイド達を優しく押し退け、リゼルに怒るメイトリックス。

だが彼女はメイトリックスよりも上手だった。

「問答無用に願います」

「ふざけやがってええ！！！」

大浴場にて、メイトリックスの怒声が木霊した。

どこのバカだ、ユッキーペロペロと言ったのは（後書き）

今回は他作品ネタが多めになりました。

多めに見ただけだと嬉しいです、OK？

ミルヒが…ミルヒが…（前書き）

一人で星詠みしてる！

挿絵を作りました！

> i 2 7 3 1 5 — 3 5 5 1 <

ミルヒが…ミルヒが…

ここはフィリアンノ城バルコニー。

ミルヒオーレのもとへ兵士が駆け寄り、報告した。

「姫様、勇者様がいらっしゃいました」

「は、はい！お通ししてください」

ミルヒオーレは嬉しそうに笑う。

「やあ、お姫様」

そこに、黒スーツに蝶ネクタイ姿のメイトリックスがやってきた。

「こんばんは勇者様！どうぞお掛けになってください！」

メイド達や兵士達は二人に気を使ったのか、バルコニーを後にした。

「今日は涼しいですから、温かいお茶をご用意しました」

そう言いながら、カップに紅茶を注ぐミルヒオーレ。

「甘いお茶は好きですか？」

「ええ、ゾッコンです」

ニヤリと笑ったメイトリックスが言う。

「よかったです！ではますます好きになると思いますよ。さあ、どうぞ！」

笑顔を浮かべながら、ミルヒオーレはメイトリックスの前に紅茶入りのカップを置いた。

すぐさまメイトリックスはカップを手にとり、口をつけた。

「…なかなか美味しいな、中身（材料）はなんだ？」

「秘密です。ですが、お茶は我が国自慢の特産品です。遠くの国では高級品として扱ってくださるのですよ」

「ほう、それはすごい」

感心するメイトリックス。

「それで、あの…勇者様…」

突如口ごもるミルヒオーレ。

「ん、どうかしたのか？」

「その…改めて謝らせてください。召還のこと、すみませんでした」
ミルヒオーレが頭を下げて詫びる。

それを見たメイトリックスは困惑した。

「ははは、気にするな。他の皆によくしてもらってる。ここでの生活も案外悪くないと思っていたんだ」

「…本当ですか？」

ミルヒーローレは、申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「ああ！俺は勇者だ。勇者は嘘は言わない！」

胸を張るメイトリックスだが、サリーを崖から落とす場面での台詞に突っ込んではいけない。

「そんなことよりもお姫様、一つ訊きたかったんだが…何故召還する勇者に俺を選んだ？」

「え！？え…えっと…その…」

メイトリックスが一番疑問に思っていたことだ。

だがミルヒーローレは言いにくそうだ。

「言えないなら無理はするな」

「いえ、違っんです！…勇者様は、星詠みをご存じですか？」

星詠み…それは紋章術の一種で、映像板を使って、遠く離れた世界のことやちよつとした未来のことが見える。

「ほう、そんなものがあるのか」

「はい。私も星詠みが出来るので、このフロニヤルドから遠く離れた世界を観ていたんです。すると…」

ミルヒオーレはそこで少し息を吸い込み、呼吸を整えた。

「朝焼けに包まれた小島があつて…その中で、大きな身体でとても勇敢に戦つてた栗色の髪の男の人のこと…」

紛れもなく、アリアスの拠点に乗り込んだ際のメイトリックスのことである。

「本当に熱くて力強い動きをされてて、大勢を一人で優勢に戦つて…とても真つ直ぐで…こんな方が私の、この国の勇者様だったらいいな…って、そう思つたんです」

「そうか…だがお姫様、俺は君達の思っているような立派な人間ではない。敵とはいえ、何人もの人間を殺した。いや、ジェニーを助けるためにはそうするほかなかった。俺は自分が間違っていたとは思つてないし、同時に褒められた人間ではないとも思っている」

そう言ったメイトリックスはため息をつき、改めてミルヒオーレの方を向いた。

「お姫様、よかつたら俺のことはジョンと呼んでくれないか？」

「えっと…ジョン様？」

「様はいらない。そろそろ様付けで呼ばれるのは疲れてしまった、お姫様と話す時くらい落ち着きたくてな」

するとミルヒオーレはせき払いし、メイトリックスの方へ向き直った。

「では…ジョン。誰よりもジョンに、勇者としてこの国に来てほしかったんです。これからもよろしくお願いしますね。このビスコッティを…いえ、フロニヤルドを…」

「ああ、約束しよう。そうだ、翌朝なんだが…」

二人は夜空の下で、約束を交わした。

*

一時間後、メイトリックスとの会見を終えたミルヒオーレは自室に戻ろうとしていた。

「姫様、勇者様とお約束ですか？」

彼女の後ろを歩くりゼルが問う。

「朝、ジョンがドライブに連れて行ってくれるって約束してくださいっただんです！」

「それはようございました」

嬉しそうなミルヒオーレを見て、自然とリゼルも微笑んでいた。

＊

一方、こちらはガレット・グラナ砦。

ガシャン！！

「クソッ…またか！」

花瓶を叩き割ったレオンミシエリが、自室で怒りに震えている。

「戦を済ませて戻っても…やはり何も変わらん！…いや！かえって悪くなった…！」

拳を握り締めるレオンミシエリ。

「さして強くもないワシの星詠み…なのに何故…こうまではつきり未来が視える…！？」

彼女の映像板には、ミルヒオーレや自分…その他大勢のビスコッテイ兵士やガレット兵士が血を流して倒れているのが映っていた。

誰が見てもこれは大惨事である。

「ワシだけでなく…ミルヒや大勢の者たちが死ぬ…？」

そう、今レオンミシエリが読みあげた通りのことが書かれていた。

「星の定めた未来が知らんが、このような出来事…どうすればよいのじゃ…！」

レオンミシエリは薄暗い部屋で一人、頭を抱えた。

ミルヒが…ミルヒが…（後書き）

今回は一段と短めでした、申し訳ありません。

次回からオリジナル展開に入って行きたいと思います！

セルクルの煮込みが死ぬほど食いたかったんだよ！（前書き）

…すみません、タイトルふざけました。

気がつけば、文章・ストーリー評価ともに10ポイントポンといた
だいたぜ！

ありがとうございます！

今回からオリジナル展開です。

セルクルの煮込みが死ぬほど食いたかったんだよ！

メイトリックスとミルヒオーレが約束を交わした翌朝の、ガレット獅子団領国居住区。

たった今、一人の住人が自宅からゴミ袋を二つ抱えて飛び出してきた。

「おい、待ってくれ！」

ゴミ捨て場には、背中に翼を生やし、作業服を着用したモヒカンヘアの男が立っていた。

「行ったかと思ったよ」

安堵のため息をもらす住人。

だが男はズボンのポケットからナイフを取り出した。

「とんでもねえ…待ってたんだ」

シュン！

その男が投げたナイフは、住人の心臓に突き刺さった。

「ぐっ…！」

住人はねこ玉にも変化せず、短い悲鳴をあげてその場に倒れた。

男は何事もなかったかのように、翼を羽ばたかせて姿を消した。

その翌日、翼の男はガレットの武器屋に現れた。

「鉄球はガレットで生まれました。ビスコッティの発明品じゃありません。我が国のオリジナルです。しばし遅れをとりましたが、今や巻き返しの時です」

武器屋の店主が男に鉄球の説明をする。

「飛び道具が好きだ」

男が呟く。

「飛び道具がお好き？結構！ではますます好きになりますよ！さあさ、どうぞ。鉄球のニューモデルです！」

そう言った店主は、男に鉄球を手渡した。

「持ちやすいでしょう？んああ仰らないで。持ち手がゴム製。でも鉄なんて見かけだけで、夏は熱いし、手が痛くなるわ錆が手に付くわ、ろくなことがない。長さもたつぷりありますよ。どんな臆病な方でも大丈夫。どうぞ回してみてください」

男が鉄球を軽く回す。

ブウン…！

「いい音でしょう？余裕の音だ。重さが違いますよ！」

すると男が重々しく、口を開いた。

「一番気に入ってるのは…」

「何です？」

「…値段だ」

その途端、男が思い切り、しかも何度も鉄球を振り回し始めた。

「ああ、何を！ああ待って！ここで力一杯振り回しちゃ駄目ですよ！待て！止まれ！！」

ズシャアアアン！！

鉄球は店の天井に直撃し、瓦礫が店主を襲った。

「うわああああ！！」

店主は瓦礫の下敷きとなり、二度と動かなくなった。

そして男は、大穴のあいた天井から飛び去っていった。

*

住人と武器屋の店主が謎の死を遂げた事件は、ビスコッティでも有名になっていた。

二人とも、何故ねこ玉にならずに死亡したのか、謎の男の正体は誰にもわからなかった。

リコッタを始めとする学院組と騎士団の偵察部隊が調査した結果…

「なんですって！？本当なのですかリコ！」

「はい、姫様…どうやらフロニヤルドの…特にガレットの辺りのフロニヤ力が著しく弱くなってるであります…」

そう、死んだ二人がねこ玉にならなかった理由はそれだったのだ。

「レオ様が心配です…アメリタ、大至急ジョンをここへ！」

「は、はい姫様！」

十分後、秘書のアメリタに連れられ、メイトリックスがやってきた。

「お姫様、助かったよ。またエクレールに絡まれていたところでな…うまく抜け出せたよ。ところで、話というのは何だ？」

するとミルヒオーレはしばらく黙りこみ、やがて口を開いた。

「実は…問題が発生しました。隣のガレットで次々と人が殺されています」

それを聞いたメイトリックスは少し驚いたが、すぐに表情を戻した。

「このフロニヤルドで人は殺せないんじゃないかったのか？」

「リコから聞いてませんか？フロニヤ力が弱まると、私達は戦でも死んでしまうことがあるんですよ」

「そつえばそうだったな。で、俺に何の用だ？それだけを俺に伝えるためだけにわざわざ俺を呼び出したわけではないのだろう？」

メイトリックスにはわかっていた。

ミルヒオーレが仕事中に自分呼び出すときは、必ず何かがあった時だけなのだ。

「はい。実は…レオ様の警護についていただけませんか？」

メイトリックスの目を見つめるミルヒオーレ。

「レオンミシエリの警護だと？そつえばお姫様は、レオンミシエリとは幼馴染みだったな」

「はい…ビスコッティの勇者が、ガレットの責任者の護衛などおかしいとお思いでしょうが、どうかお願いします！」

そう言ったミルヒオーレは、メイトリックスに頭を下げた。

「…いやお姫様。この間、言ったはずだ。俺はビスコッティだけでなく、フロニヤルド全域を守る勇者だとな」

「ジョン…ありがとうございます!!」

こうして、メイトリックスがレオンミシエリの警護をしばらく担当する事が決定した。

*

翌朝、ガレットのグラナ砦内にメイトリックスの姿があった。

ミルヒオーレが親書を書いていたので、入るのに支障はなかった。

「…別にワシはお主の力など借りん。犬姫にそう伝えておけ」

レオンミシエリはそれだけ言うと、自室に閉じ籠ってしまった。

「気にすんなよ勇者、レオ閣下も気が立ってんだよ。なんせ自分の国で死人が出てんだからな」

横にいるガレット兵が耳打ちする。

「それもそうだな」

メイトリックスはそれだけ言い、近くの展望台に立っているガレット兵に目を向けた。

「おい展望台、そつちは異常ないか？」

するとそのガレット兵は欠伸びながらメイトリックスの方を向いた。

「…ああ、だあいじょうぶだよ。特に異常はな…」

グサッ！！

「「！？」」

突如、展望台のガレット兵が目を見開き、仰向けに倒れ込んだ。

よく見ると、彼の額にはナイフが刺さっている。

「お、わあああああ！！」

メイトリックスの隣の兵士がうるたえ、悲鳴をあげる。

「クソッ、敵襲か…！」

ただ一人、落ち着いたメイトリックスが素早く展望台に移動し、外の様子を窺う。

そこには、背中に翼を生やした男が展望台に着地したところだった。

バキッ！！

「ぐおッ！？」

メイトリックスの拳が男の顔面にねじ込まれる。

ゴキッ…！

気絶した男の首に腕をまわし、メイトリックスは彼の首の骨をへし折った。

ドガアアアン…！

その時、下の方から大きな爆発音が聞こえてきた。

「下の階が心配だ…ここをしっかりと見張ってる。奴らが来るぞ」

だがガレット兵はまだ震えている。

「ど…どうすんだよ…！オレ…こんなの初めてだぜ…！」

「いいか、敵は必ず来る。それを感じ取れ」

するとガレット兵は目に涙を浮かべ、メイトリックスの方を向いた。

「ど…どうやってだよ！？匂いを嗅げっていうのか…！？」

「ああ、そうだ」

そう答えると、メイトリックスはライフルを構えて階段を下った。

ちなみに本日より、銃弾は実弾である。

念には念をと、リコッタがメイトリックスが持っていた実弾をベースに開発したのだ。

階段を下りていくメイトリックスだが、どこにも敵の姿はない。

「妙だな…敵の姿が全くないというのは変だ……まさか！」

しまった、といった表情を浮かべたメイトリックスは、階段を駆け上がった。

（先程の爆発は…おそらく俺を最上階から遠ざけるための陽動…！
ということは敵の狙いは城の陥落ではなく、レオンミシエリの誘拐か…！）

そして最上階に到着したメイトリックスを待っていたのは、心臓を貫かれて息絶えたガレット兵の死体と、あっさり突破されてドアに大穴が開いた、レオンミシエリの部屋だった。

セルクルの煮込みが死ぬほど食いたかったんだよ！（後書き）

オリジナルのシリアス回…少ししんどかったですw

ですが、これから頑張っていきたいと思います！

俺は勇者だ、殺し屋じゃない（前書き）

前回ミオン砦と書きましたが、グラナ砦の間違いでした。すみませ
ん。

俺は勇者だ、殺し屋じゃない

ドガッ！

ドアを蹴り、メイトリックスはレオンミシェリの部屋に足を踏み入れた。

そこには既にレオンミシェリの姿は無く、壁にも大穴が開いていた。

「クソッ、遅かったか…！」

舌打ちし、穴から外を覗くメイトリックス。

だが時既に遅し、翼の男が気絶したレオンミシェリを抱えて小さくなっていた。

「チッ…すまない、レオンミシェリ…」

*

グラナ砦襲撃事件の際、犠牲者は犯人側を含めて三人だった。

比較的小規模だが、国家元首が誘拐されたのでガレットの現状は酷かった。

脅迫文の類はまだ届いていない。

レオンミシェリの弟・ガウルやジェノワーズ、バナードがガレット領に残り、ガウルの腹心の部下であるゴドウィンがメイトリックスに同伴して現在に至る。

「そうですか…」

「すまないお姫様…俺の責任だ」

会議室にて、メイトリックスはミルヒオーレに任務失敗を告げた。

「いえ、ジョンがいなければもっと酷いことになっていたかもしれない」

「とはいえ勇者！この責任をどう取るつもりだ！？」

椅子に座ったエクレールがメイトリックスに問いかける。

「誘拐されたのはガレットのトップ、レオンミシェリ閣下だぞ！犠牲者を小規模でおさえたとはいえ、貴様がついていながら情けないものだ！勇者として召還してくださった姫様に申し訳ないとは思わないのか！？」

「…ガタガタ言うな、クソ野郎」

突如メイトリックスが静かに口を開いた。

「…！？」

エクレー^ルは勿論、その場にいた大勢の者が黙^もり込んだ。

誰も、このように静かに激怒するメイトリックスを見たことがなかったのだ。

「デカイ声を出すな！耳があるんだ！偉そうにただ喚^わき散らしやがつて、それしかできんのかこの大根野郎！！」

ポカンと口を開け、気圧されるエクレー^ル。

メイトリックスは彼女だけでなく、レオンミシェリを守れなかった自分のことも責めているのだ。

「勇者殿……」

「俺を何だと思ってる！？ヒーローだ、勇者だ！俺に怒鳴るな！！」

ボタン！

その時、リコッタが会議室に駆け込んできた。

「皆さん！グラナ砦を襲撃した人の正体がわかったであります！」

そう叫んだリコッタは、机に人数分の資料を置いた。

「……これは！」

資料を手にとったロランが驚きの声をあげる。

「そうであります…この人たちは、コンドル帝国の人達であります！」

コンドル帝国…帝国と呼ばれているが、国はそう大きくはない。

その国に住む者は皆鳥のような翼を生やし、トサカのようなモヒカンヘアの髪型をしている。

かつてはビスコッティやガレットにも科学者として在籍していたが、どの者もマッドサイエンティストにも勝るとも劣らないほどの危険な科学力を持っていたので、全員が国外追放を受けたのだ。

追放された彼らはビスコッティやガレットの前から姿を消し、コンドル帝国を建設したのだ。

「動機は…我々への復讐か」

ゴドウィンがそう呟く。

「どうやらそのようだ。危険な人物を追放すると報復を受ける恐れがある。俺の世界でもそうだった」

メイトリックスが言っているのはベネットのことである。

「考えられるケースは…奴らがフロニヤ力を弱くする装置でも開発し、ビスコッティとガレットの上空で装置を作動させたのだろう」

「流石でござるな、勇者殿。それなら納得がいく」

「た、確かに……！」

ダルキアンが納得し、その横でユキカゼも頷く。

「ところでリコッタ、例の武器は完成したか？」

メイトリックスがリコッタの方を向く。

「はい！ついさっき完成したでありますよ！」

「リコ、何か開発したのか？」

エクレールがリコッタに尋ねる。

「ああ、チェーンガンを造ってもらった」

代わりにメイトリックスが答える。

実はグラナ砦に向かう直前、万が一のことを考えてリコッタに頼んでいたのだ。

「ありがとうリコッタ。今度好きなだけアイス奢ってやるからな」

「嬉しいであります！」

リコッタの頭を撫でたメイトリックスは、会議室の出口へと歩き出した。

「ジョン、何処へ行く気ですか？」

ミルヒオーレが椅子から立ち上がり、メイトリックスを呼び止める。

「コンドル帝国だ。レオンミシエリを助けに行く」

「やっぱり！駄目ですジョン！お一人では危険です！」

メイトリックスに駆け寄るミルヒオーレ。

だが彼はミルヒオーレを振り返らなかった。

「お姫様…俺なら大丈夫だ。星詠みとやらで俺の戦いざまを見てくれたのならわかるだろう？」

「でも…私はジョンが心配です…！」

次第に目に涙を浮かべるミルヒオーレ。

だがその時、

ガタッ！

「よし。俺も一緒に行こうではないか」

立ち上がったのはガレット領のガウルの使い、ゴドウィンだった。

「閣下を救出せねば、ガウル殿下に合わせる顔がないからな。手伝うぞ筋肉勇者！」

「…そうか、ならアテにさせてもらうぞ」

そう言ったメイトリックスはゴドウィンに近寄り、彼に右腕を差し出した。

「ああ。こちらこそな！」

こうして二人は握手を交わした。

「ありがとうございます！ゴドウィン將軍！」

ミルヒオーレがゴドウィンに頭を下げる。

「…では、拙者達もお供させてもらうでござる」

なんとオンミツ部隊の代表格、ダルキアンとユキカゼも立ち上がった。

「いいのかお前達、下手をすれば死ぬんだぞ！それでもいいのか！？」

二人の身の安全を心配するメイトリックス。

だが、彼女達の決意は揺るがなかった。

「大丈夫でござる。拙者もユキカゼも、スピードには自信があるでござる。それに拙者達はオンミツ部隊…裏工作はお手の物でござる

「！」

確かに裏工作部隊は必要だ。

それに彼女達は戦場慣れしている。

メイトリックスが出した結果は一つだった。

「わかった。ありがとう」

「ま…待て勇者！」

その時、何者かがメイトリックスを呼び止めた。

「…どうしたエクレール？」

「さっきはすまなかった…私も連れて行け」

エクレールは手をあげ、メイトリックスに近寄ってきた。

「いいか、これはいつもの戦場ではない。それにお前は親衛隊長とはいえ、まだ子供だ」

「うるさい！」

「…！」

大声をあげたエクレールに驚くメイトリックス。

「私はお前のことが心配なんじゃない！姫様の…悲しむ顔を見たく

ないだけだ!!」

このままでは幼馴染みのレオンミシェリが殺され、ミルヒオーレが悲しむ。

エクレールはそれを恐れているのだ。

「勇者殿、どうか連れて行ってやってくれぬか？」

彼女の兄、ロランがメイトリックスに頭を下げた。

「……いいだろう」

しばらく考え込んだメイトリックスが結論を出した。

「勇者……!」

「ただし、俺が役に立たないと判断したら即刻帰ってもらおう。それが条件だ。いいな？」

「ああ。構わない」

コクンと頷くエクレール。

「よし。ならば行くぞ!」

メイトリックスが踵を返し、出口へと歩き出した。

「新生コマンドー部隊でいけるー!」

ユキカゼが笑顔でそう言う。

「ああ、そうだな」

こうしてメイトリックス、ゴドウィン、ダルキアン、ユキカゼ、エクレールの新生コマンドー部隊の戦いが幕を開けた。

俺は勇者だ、殺し屋じゃない（後書き）

最初はエクレールは留守番の予定でしたが、メンバー不足なので急遽追加しました。

ご意見、ご感想お待ちしております！

I · 1 1 b e b a c k ! (前書き)

コマンドー友達に見せたら全員ハマったwww

I'll be back!

会議室を後にしたコマンドー部隊は、リコッタに案内されて研究室に来ていた。

「何だと!？」

「はい!自動車の燃料をガソリンでなく、残飯にしております!」

なんとガソリンの開発を断念したのか、リコッタは燃料タンクを造り変え、残飯を投入すれば動くような車にしたのだ。

「どこかの漫画にありそうな仕様だな…凄い発明じゃないか!」

「ありがとうございます!」

メイトリックスはリコッタの頭を撫でてから巨大な鞆にチェーシングを仕舞い、他の隊員に防弾ジャケットを配った。

「服の下にそれを着ろ。それさえ着れば、殆どの攻撃を受けても大丈夫だ」

「格好いいでござる!」

ユキカゼが笑顔を浮かべる。

「ほらユキカゼ、エクレール。拙者達はこちらで着替えるでござる」

ダルキアンがユキカゼとエクレールを連れ、その場から去っていった。

「ところで筋肉勇者よ、俺達の準備が終わったら何処へ行くつもりだ？」

ゴドウィンがメイトリックスに尋ねる。

彼はメイトリックスがどのような行動をとるのか気になるのだ。

「とりあえずガレットに立ち寄ろう。もしかすると脅迫状が届いているかもしれん」

敵がターゲットを殺さず、生かしたまま誘拐するのなら何かしらの要求がある。

メイトリックスはそう睨んでいた。

「なるほど…確かにその通りだ。場慣れしているな、筋肉勇者」

ゴドウィンはすっかり感心し、防弾ジャケットを着用してその上からいつも着ている鎧を装着した。

「準備できたでござるよ」

奥からダルキアン達が戻ってきた。

「うう…胸がキツイでござる…」

ユキカゼが顔をしかめる。

「なんと…贅沢な悩みなんだ…」

ぼそりと呟くエクレール。

それに気づいたメイトリックスが口を開いた。

「なんで大きいのにこだわるんだ？小さい方がスッキリするのに」

「…おい勇者…今度余計なこと言うと八つ裂きにするぞ…」

エクレールが静かにメイトリックスを睨みつける。

「すまなかった…頼みがあるんだが、俺を責めないでくれ。死ぬほど反省している」

「遅いわ!!」

手は出さなかったものの、エクレールがメイトリックスに怒声を浴びせた。

「ははは。まったく、勇者殿は気配りが上手でござるな」

「こんな奴が気配りですか!？」

ダルキアンの言葉に驚くエクレール。

「君にはわかってしまうようだな」

「ああ。エクレールはまだ若いからか、緊張している。だから緊張をほぐそうとしたのでござろうな」

ダルキアンの言葉は的を得ていた。

だがメイトリックスの表情は再び険しくなった。

「全員ジャケットを着たのなら、まずガレットに行くぞ。脅迫状が届いているかもしれんからな」

そう言ったメイトリックスは、ロケットランチャーを担いでナイフを装備した。

「ゴドウィンはチェーングンを、皆は他の武器を頼む」

「ああ任せておけ」

「了解でござる」

チェーングンの入った鞆をゴドウィンが軽々と担ぎ、ダルキアンがライフル、ユキカゼが手榴弾、エクレールがマシンガンを持った。

「世話になったなりコッタ」

「いえ！皆さん頑張ってくださいであります！」

再びリコッタの頭を撫で、メイトリックスは他の四人を振り返った。

「最後に確認するがお前達、相手を殺せるか？やらなければやられる。そういうものだ。大丈夫か？」

すると四人とも力強く頷いた。

「よし、なら行くぞ」

そして五人のコマンドーは研究室を後にした。

*

メイトリックス達は城の外へ移動し、キャデラックに武器を積んでいた。

トランクに全て載せ終わった後、彼は四人に拳銃を配った。

「護身用に持つておけ。必要な時がくるだろう」

「これもしコが造ったのか？」

エクレールが問うが、メイトリックスは首を横に振った。

「いや、これは俺が元の世界から持ってきたものだ。弾はちゃんと入っている」

四人は拳銃を懷に仕舞い、キャデラックに乗り込んだ。

「ところで筋肉勇者、グラナ砦とミオン砦のどちらへ行く気だ？」

ゴドウィンがメイトリックスに問う。

「ミオン砦に行ってみよう。ユキカゼ、君は助手席だからシートベルトをしめておけ」

「…勇者殿、その…しーとべると、というのがちょっとわからないでござるよ…」

助手席のユキカゼが困った表情を浮かべる。

「ああ。それならこれだ」

メイトリックスは慣れた手つきで、ユキカゼのシートベルトをしめた。

「ありがとうでござる！勇者殿は本当に格好良くて頼りになるでござる！」

笑顔を浮かべるユキカゼ。

「スピードは君には負けるさ。とにかく急ごう、敵は待ってくれんぞ」

そう言ったメイトリックスも運転席に滑り込み、アクセルを踏んだ。

ブオオオオオオオン！！

五人を乗せたキャデラックはビスコッティを出発し、ガレットへ向かった。

*

十分後、キャデラックはミオン砦に到着し、メイトリックス達はガウルと対面した。

「よう勇者。お前が姉上を助けに行ってくれるそうだな。俺やジェノワーズはガレット領のパトロールで手一杯だからな」

「俺の責任でもあるからな。ところで、そちらに脅迫状の類は届いたか？」

するとガウルの専属メイド、ルージュがメイトリックスに駆け寄ってきた。

「勇者様！こちらでございます！」

ルージュが渡したのは、一通の封筒だった。

メイトリックスはすぐさま封筒の中の手紙を出し、それを広げた。

『ガレットの諸君。レオンミシエリ姫は我々コンドル帝国が預かった。返してほしければ、我々の国外追放を撤回しろ。もし裏切っておかしな真似をすれば、姫のバラバラ死体が届くぞ』

脅迫状には以上のことが書かれていた。

「クソツタレ！娘がさらわれた時と同じ…いや、それ以上に危険な事態が起きるぞ…！」

「どういことですか！？」

ルージュがメイトリックスに顔を向ける。

「コンドル帝国の奴らは、君達が危険と恐怖を感じるほどの科学力を持っているんだろう？自分達で国を建設できるような奴らが、この程度でレオンミシエリを返すとは思えん。恐らく内側からガレットを滅ぼす気だろう」

それを聞いたガウルやルージュ、ゴドウィン達が驚いた。

「な、何だと！？」

「勇者殿、それは本当でござるか…？」

「いや、今の話は俺の憶測だが…あいつらならやりかねん。現にフロニヤ力を弱めて、四人も殺した奴らなのだからな」

声を潜めるメイトリックスに対し、ユキカゼが声をあげた。

「ゆ、勇者殿！このようなこと…一体誰が止めるのでござるか！？」

するとメイトリックスはユキカゼの肩に手を置き、言い放った。

「俺達だ」

この一言に、その場にいた全員が安心したのは言うまでもない。

「頼んだぞ勇者、皆…」

「お願いします！皆さん！」

そしてコマンドー部隊がガウルの部屋を後にする前、メイトリックスが二人を振り返った。

「レオンミシエリを連れて、必ず戻ってくるぞ！」

そう言い、メイトリックスはガウルを後にした。

I · l l b e b a c k ! (後書き)

今回はユツキーの出番が多かったのは、作者の自己満足です。

お許しください。

。。。！殺されたんじゃ…（前書き）

残念だったなあ、トリックだよ

今回はあのキャラが登場します。

。。。！殺されたんじゃ…

ミオン砦の入口付近に停めたキャデラックに戻った五人だが、誰も口を開かなかった。

メイトリックスの一言で安心したが、やはり先程の話のショックが大きかったのだ。

「…お…おい、勇者…」

そんな中、エクレールが口を開いた。

「なんだ？」

「その…私達が、万が一しくじったら…どうなるのだ？」

するとメイトリックスはしばらく黙り込み、ため息をついた。

「…最悪、ガレットの人間は皆殺した。恐らくビスコッティにも危険が及ぶだろう」

「そ、そんな！」

ショックを受けるエクレールに対し、ゴドウィンが鼻で笑った。

「ふん。話を聞いた上で臆するとは…やはりお前は、見習いに毛が生えた程度か」

「やめるゴドウィン。エクレー、嫌なら帰ってくれてもかまわない。誰も君を責めはしないよ」

するとエクレーはメイトリックスを睨みつけ、大声をあげた。

「ふ…ふざけるな！私は絶対にレオ閣下を助け出す！」

するとメイトリックスはニヤリと笑った。

「それが聞きたかった。さ、皆乗ってくれ。今からコンドル帝国へ乗り込むぞ」

「おう！」

「心得たでござる！」

四人は頷き、キャデラックに乗り込んだ。

ちなみに今度は本人の希望で、ダルキアンが助手席に座った。

「おお、これが前の席の眺めでござるか！」

助手席に座ったダルキアンが笑顔を浮かべた。

「新鮮か？」

メイトリックスも運転席に乗り、自らのシートベルトをしめた。

「ああ。おっと、シートベルトでござるな」

思い出したようにシートベルトをしめるダルキアン。

「ダルキアン、君にナビを頼みたい」

「…ナビ、って何でござるか？」

するとメイトリックスは、ダルキアンにフロニヤルド地図を渡した。ちなみにそれは、ガウルの部屋を後にする際にルージュから手渡されたものだ。

「その地図を読みながら、コンドル帝国までの道案内を頼みたい」

「そうでござるか。ええと、ここがガレットなので…今は真っ直ぐ進むでござるよ」

彼女はオンミツ部隊頭領。

しょっちゅう遠出をするので、地図を読むのには慣れていた。

「わかった。発進する」

そう言ったメイトリックスはエンジンをかけ、アクセルを踏んだ。

*

メイトリックス達がガレットを出発してから一時間後、コンドル帝国では新たな動きがあった。

「ダリウス大統領！ガレット領国から返事が届きました！」

宮殿の最奥部である大統領部屋に、手紙を手にした男がやってきた。

「よし、入れ」

「はッ！失礼します！」

部下の男が部屋に入り、ダリウスと呼ばれた男に手紙を渡す。

「んん…」

『コンドル帝国へ。国家元首が誘拐されたことで、当方も混乱している。一日だけ猶予が欲しい。明日に必ず返事を出す』

返事にはそう書かれていた。

「悠長な奴らだ。まあいい、考えさせてやれ。どの道我々には勝てるのだからな」

椅子にふんぞり返るダリウスだが、何かを思い出したのかすぐに立ち上がった。

「そうだ。ところで“アレ”は完成したか？」

すると部下はニヤリと笑い、それに答えた。

「ええ。あとは現地に運んでキーを回すだけ…そうすればビスコッティであろうとガレットであろうとお陀仏でさあ。へへへへ！」

「五年前に異世界からやってきた、あの男が持っていたファイルが役に立ったな」

どうやらメイトリックス以外にも、異世界からやってきた者がいたようだ。

「ところで、レオンミシエリ姫はどうしてる？」

「ちょうどその男が面倒見てまさあ。ま、あの男自体俺らより力が弱いすからねえ。ちょうどいいでしょう」

*

ここはコンドル宮殿の薄暗い部屋。

捕らわれたレオンミシエリはそこにいた。

「またお主か…ガレットをどうする気じゃ…？」

「そうカツカすんなよ。なあ、こっから出してやつからさあ…おたくにいい夢見させてやるぜ？」

その男はニヤリと笑いながら、レオンミシエリに顔を近づける。

「ろくでもない夢じゃろう？ワシにかまうな！近づくな！」

レオンミシェリは彼を威嚇する。

「ケツ、アバズレが…」

男はそう吐き捨て、部屋を後にした。

「早よう失せるサリー！お主の顔など見とつない！」

そう、その男はかつてメイトリックスに殺されたはずのアリアス―
味の一人、サリーだったのだ。

何故サリーがいるのかは、五年前に遡る。

*

「お前は最後に殺すと約束したな」

「そうだ大佐…た、助けて…」

「あれは嘘だ」

パッ！

「わああああ…！！！」

メイトリックスに嘘をつかれ、崖から落とされたサリー。

崖はかなり高く、地面に叩きつけられれば命は無い。

やがて地面が見えてきた。

（し…死ぬ…！）

サリーは死を覚悟した。

だが突如、地面に魔法陣が現れた。

「え…？」

サリーはそのまま魔法陣の中心の穴に吸い込まれ、姿を消した。

「俺あ…死んだのか…？」

少しの間、意識を失っていたサリーが目を覚ます。

「おお、気がついたようだな」

そこにいたのは、背中に翼を生やした三人の男だった。

「あ…あんたらは？ここは何処なんだ…？」

「ここはお前のいた世界ではない。異世界フロニヤルド、コンドル帝国だ。この施設は宮殿…私は大統領のダリウスだ」

男の一人はダリウスと名乗った。

「お、俺に何をした！」

「君を召還したのだ。我々の召還方式は特殊でね、君の世界の物を一つ、ランダムでフロニヤルドに持ち込めるのだ」

以前ガレット領国に放置されていたキャデラックは、その際に召還に巻き込まれたものだったのだ。

「…俺はどうすりゃいいんだ？あんたらの奴隷にでもなれってか？」

サリーは悪態をつくが、ダリウスは笑顔で彼の肩に手を置いた。

「君の知識が、我々に必要だ」

こうしてコンドル帝国にサリーが加わった。

サリー個人の戦闘力は平均的だが、彼はある兵器のデータファイルを持っていたので、コンドル帝国の軍事発展に活用されたのだ。

（ここにはメイトリックスもいねえ。それに一生遊んで暮らせるぜ…！）

調子に乗るサリーだが、地獄はすぐそこまで迫ってきていた。

。。。！殺されたんじゃ…（後書き）

本来はベネットにする予定でしたが、サリーの方が違和感なくフロニャルドに來させることができるので、後者にしました。

(コマンドー部隊を)支えてんのは皆だ… (前書き)

俺だけじゃないんだぜ！ 当たり前です。

（「コマンドー部隊を」支えてんのは皆だ…

ガレットを出発してから二時間後、キャデラックはコンドル帝国近くの山に到着した。

宮殿が目視できるほど近い距離である。

メイトリックスはキャデラックを止め、口を開いた。

「どうしたのだ？」

ゴドウィンがメイトリックスに問う。

「皆に作戦を説明する。聞いてくれ」

メイトリックスはシートベルトを外し、後部座席を振り返った。

「作戦？」

「ああ。まず、俺とゴドウィンとエクレールが奴らに攻撃を仕掛ける。その隙にダルキアンとユキカゼは城に潜入して、ブレーカーを全部落としてくれ。余裕があれば武器庫も破壊してほしい」

そう言いながら、メイトリックスはダルキアンにクレイモアを三つ手渡す。

「なるほど、陽動作戦でござるな」

クレイモアを受け取ったダルキアンが納得する。

「そうだ。だが奴らが俺達三人を見つけるとまでは潜入するな。何処かに隠れている」

「どうしてでござるか？」

首を傾げるユキカゼ。

「城がドンパチ賑やかになってからだ。内部が手薄の方が潜入しやすいからな」

「流石でござる勇者殿！」

先程からメイトリックスに驚かされっぱなしのユキカゼである。

「ユキカゼ…いや皆。何度も言うが、これはいつもの戦ではない。敵の攻撃が少しでも当たれば死ぬと思え」

すると四人は大きく頷いた。

「…よし。なら皆、武器を装備して待機だ」

そう言ったメイトリックスはキャデラックから降り、トランクを開けた。

迷彩の塗料を取り出し、顔に塗る。

次に防弾ジャケットに手榴弾や弾倉を装備した。

「おお…」

あまりの手際の良さに、装備完了した四人が息を飲む。

特にエクレールは何度かメイトリックスと共に戦に出陣したことがあるが、あのように真剣な表情の彼は見たことなかった。

そして本格的な武装も初見であるので驚いた。

（勇者…こんなに格好よかったのか…？）

思わずメイトリックスを見つめてしまうエクレール。

だがすぐ我に返り、頬を紅潮させて彼から目を逸らした。

そんなことをしている間にもメイトリックスのフル装備は終わり、ライフルを手にとって肩に乗せた。

デエエエエー！！

これが仮に映像ならばこのような効果音が流れるであろう。

「スピードが命だ。一日で済ませるぞ」

*

その頃コンドル宮殿では、

「大統領、では行つて参ります！」

「ウイグラシアス」

コンドル帝国最強の兵士、ハーティス大尉が20数名の部下を引き連れて国を出発したのだ。

一つの巨大な箱を六人で支えている。

ハーティス達は翼を羽ばたかせ、空へと飛び立った。

*

「…まずい、隠れる！」

空を飛ぶハーティス達を、コマンドー部隊も確認していた。

彼らはキャデラックにすぐさま乗り込んだ。

ダルキアンとユキカゼは既に別の場所で待機している。

「勇者、あれはコンドル帝国のハーティスだ」

エクレールがそう告げる。

「そんなに有名なのか？」

「ああ…ハーティスはたった一人で一個騎士団を倒すほどの実力者だ。レオ閣下と同じくらい強い」

彼女の説明にメイトリックスは納得した。

「なるほど…それは厄介だな。だが奴らは何処に行くつもりだ？」

「ハーティスは国周辺の偵察も徹底していると聞いたことがあるから、今のは偵察部隊だろう。それより勇者…アレを本当にやるのか？」

心配そうな表情を浮かべるエクレール。

「当然だ。折角リコッタが造ってくれたんだからな。彼女の期待を裏切っちゃ悪い」

そう言ったメイトリックスはエンジンをかけた。

「エクレール、ゴドウィン。しっかり掴まってるよ」

黙って頷く後部座席の二人。

「よおおし行くぞおおお!!」

バンッ！

メイトリックスがアクセルを踏み、キャデラックが山を猛スピード

で下り、コンドル帝国の門目掛けて突き進む。

やがて門の正面までやってきた。

そして…

ガシャアアアン！！

見張りが一人も立っていない門を突き破り、帝国へと突入した。

これがメイトリックスの考えていた、特攻作戦である。

リコッタによって改造されたキャデラックは、並の紋章砲を耐えきる強度を持っている。

門を破壊することは、暖かいバターを切るように容易なことだった。

「て、敵襲だ！！」

帝国に残留していた兵士達がぞろぞろと宮殿から出てくる。

「ゴドウィン將軍、チェーンガンをバッグから出すんだ！」

エクレールが足元に置いた鞆をゴドウィンに渡す。

「おうー！」

ゴドウィンは領くと同時に、鞆から顔を出したチェーンガンを手にとった。

「ガレット領民の仇はとってやるう!!」

（コマンドー部隊を）支えてんのは皆だ… （後書き）

次回から本格的なドンパチタイムです。

よせよバカ、ジェノワーズの出番が無いと言っなんて（前書き）

タイトルの元ネタはトゥルーライズの「よせよバカ、ツナサンドに盗聴マイク仕掛けるなんて」です。

それはそうと文章、ストーリー評価共に19 pt ポンといただいたぜ！

本当にありがとうございます！

ドガアアアン!!

「うわああああ!!」

入口には沢山の兵士達がぞろぞろと出てきていたので、彼らは紙切れのように吹っ飛んだ。

「くそッ、撃て撃て撃て!!」

ドドドドドド!!

コンドル兵士達もマシンガンをメイトリックスに向かって放つが、銃の訓練を積んでいない彼らがメイトリックスに弾を当てるのは不可能に近かった。

「ふん!!」

ドオン!

二発目のロケットランチャーを再び兵士達に放ち、彼らを鎮圧する。メイトリックスは空になったロケットランチャーを捨て、ライフルに持ち替えた。

「俺は行く！後は頼んだぞ！」

キャデラックから出たゴドウィンとエクレールにそう伝え、メイトリックスは宮殿へと突入していった。

*

一方その頃、ダルキアンとユキカゼは宮殿の裏口へと向かっていた。

「勇者殿達、派手にやっているでござるな」

彼女らの耳にも、コンドル兵士達の悲鳴や爆発音が聞こえていた。

「はいお館様…潜入なら今です！」

扉に縄ばしごをかけ、二人は裏口への侵入を果たした。

メイトリックスの言っていた通り、兵士は殆ど外に出て行ったので内部は手薄だった。

「ブレーカーは恐らく…地下でござるな。ユキカゼは地下を頼む」

「心得てございます！」

ダルキアンに頼いたユキカゼは、地下への階段を下りていった。

「さて…拙者は武器庫を探すでしょう」

そう呟いたダルキアンも、宮殿の奥へと進んでいった。

*

メイトリックスが中に突入して以降、地上ではエクレールとゴドウィンが奮闘していた。

「このおおッ！」

ズドン！

「ぐわあッ！」

エクレールに胸を撃たれ、コンドル兵が倒れ込む。

「ハア…ハア…ゴドウィン將軍、殆ど片づいたな」

「ああ。あの筋肉勇者のチェーンガンのおかげだ」

二人はキャデラックのドアを盾代わりに、車の後ろに隠れながら戦っていた。

「もう弾切れか…これは参った…」

エクレールが拳銃をいじりながらそう呟く。

「切れたらさっさと入れ替えるマヌケ！」

「わ、わかっている！」

そう言ったエクレールは弾を補充する。

「あそこに敵が二人居る！」

突如声が聞こえ、足音が近づいてくるのがわかった。

「敵がきたぞ親衛隊長！」

「ああ、迎え撃つ！」

互いに領いたエクレールとゴドウィンは背中を合わせた。

やがて十数分後、外の敵兵は全滅していた。

遠くの敵はゴドウィンのチェーングンの餌食に、至近距離までやってきた敵はエクレールの短剣に斬られたのだった。

*

「随分外が騒がしいな…何かあったのか？」

レオンミシェリの部屋にて、彼女の見張りをしているサリーは呑気に欠伸する。

「…ま、いつか。ビールでも飲んでリラックスしょ」

そう呟きながら、ビール瓶の栓を抜こうした時だった。

「…ええい！」

バシンッ！

なんとレオンミシェリが突如立ち上がり、サリーの顔面に拳を叩き込んだのだ。

「おわわッ…！」

予期せぬ出来事に驚くサリーだがもう遅い。

彼は床に尻をつき、無防備な状態だからである。

「お主い…」

レオンミシェリはビール瓶を手に取り、サリーを見下ろす。

「一発どつじゃー！」

ガンッ！

「ぐぁッ……！」

サリーの頭に瓶を叩きつけるレオンミシエリ。

相当頭にきているようだ。

「おかわりはぁッ！？」

ガンッ！

二発目には、サリーの頭から大量の血がドクドクと溢れ出ていた。

「……あぐう……！」

サリーは気絶していないものの、意識は朦朧としていた。

「さて、ワシは失礼するかの……っッ！」

部屋を後にしようとしたレオンミシエリだが、拉致されてすぐ脚を捻挫したため思うように動けない。

「まずい……このままではワシはこやつ仲間殺されてしまっ……！」
だがヒーローはやってきた。

ドガッ！！

突如扉が蹴破られ、一人の大柄な男が入ってきた。

その男を目の当たりにし、レオンミシェリもサリーも驚いた。

「ビスコッティの筋肉勇者……！」

「メイトリックス……！？」

サリーは逃走を試みるが、足元がおぼついて思うように動けない。

「……サリーか。レオンミシェリ、君は部屋の外で待っている。こいつに話がある」

そう言ったメイトリックスは、レオンミシェリに弾切れのライフルを手渡した。

「それで外へ出ていてくれ」

レオンミシェリは頷くと、ライフルを松葉杖代わりにして部屋の外に出ていった。

「さあてサリー、ゆっくり話をしようじゃないか」

よせよバカ、ジェノワーズの出番が無いと言っなんて（後書き）

次回、コンドル帝国の作っていた兵器の正体を明かします（おおよその方は見当がついているでしょうが）。

良い逃げ道だな、マヌケ（前書き）

コンドル宮殿戦、終結します。

良い逃げ道だな、マヌケ

メイトリックスはサリーの胸ぐらを掴み、彼を壁に叩きつけた。

「さあ、知っていることを全部ゲロツと吐くんだ。命だけは助けてやる」

「い…嫌だ…！五年前だってそう言っつて、俺を崖から落としたじゃねえか…！」

中々サリーは口を割ろうとしない。

「言わなければ今すぐ殺す」

そう言ったメイトリックスはアサルトライフルの銃口をサリーの額に突きつけた。

「わ、わかった！言うからやめてくれ！」

サリーは震えながら床にへたり込み、口を開いた。

「…実はな、コンドル帝国が造った兵器は…核兵器だよ」

「なにッ！？」

メイトリックスは驚愕した。

コンドル帝国が技術力が優れているとはいえ、まさか核兵器を製造していたとは夢にも思わなかった。

「…そんなものをどうして造ったんだ？それと核は何処だ！？」

「場所は知らねえよ…！このダリウス大統領が、ビスコッティとガレットに復讐するためだ。あいつらは…優秀な自分達を追放した二国を相当恨んでるんだよ…」

サリーは額の血を拭う。

「で、お前が核のデータファイルを持っていた理由は？」

「…あんたが大暴れしたショッピングモールで…その筋の奴と取引したんだ。俺が知っているのはここまでだ」

「そうか…ならもう行け。このゲス野郎」

そう言ったメイトリックスは、アサルトライフルを下ろした。

「う、うわあああああ！！」

悲鳴をあげながら、サリーはその場から逃げ出した。

「おい筋肉勇者！」

声をかけられ、振り返るとレオンミシエリが顔を出していた。

「何故あやつを見逃したのじゃ！？」

「あいつは殺す価値もない。それに放っておいてもどうせ死ぬ。それより君、足を痛めたのか？」

メイトリックスはアサルトライフルを背中に装備し直すと、レオンミシエリに近づいた。

「ああ…まったく、ワシとしたことが情けない…」

するとメイトリックスはその場に屈み、ヒョイとレオンミシエリを抱え上げた。

「んなッ…！？何をするか筋肉勇者！」

レオンミシエリは顔を赤らめ、メイトリックスから逃れようとジタバタする。

「意地を張っている場合じゃない。とにかく俺を信じろ」

「無理じゃ。助けられてまだ五分も経ってないからの…」

強がるレオンミシエリだが、痛みは嘘をつかない。

再びズキズキと痛んできたのだ。

「うッ…！」

「だから言つたろ。無理はするな」

そう言ったメイトリックスは、レオンミシエリを抱えたまま歩き出した。

「うう…屈辱じゃ…この借りはいつか必ず返すぞ」

「それだけの元気があるなら大丈夫だな」

レオンミシエリはさらに顔を真っ赤にし、すっかり大人しくなった。

「…かたじけない」

*

「さて、これでいいでござるな」

その頃、全てのクレイモアを仕掛け終わったダルキアンが武器庫を後にしたのと同時に、宮殿の照明が全て消えた。

ユキカゼもブレーカーを落とすのに成功したようだ。

（あとは勇者殿やユキカゼと合流すれば……ん？）

ダルキアンの目の前に、一人の男が現れた。

「んなッ…！？」

男はダルキアンを見て驚くが、対する彼女は落ち着いている。

「ほう…これはダリウス殿ではないか」

「ち、ちくしょう！」

舌打ちしたダリウスは床を蹴り、駆け出した。

「ま、待つでござる！そちらは…！」

ダルキアンが止めるが、遅かった。

なんとダリウスはバルコニーの方へ走っていき、そこから勢い良く転落してしまったのだ。

「うわああああ！！」

やがて彼の悲鳴のすぐ後、グシャツと乾いた音が聞こえてきた。

「…暗くてよく見えなかったのでござろうな。拙者も気をつけなければ…」

だが彼女は仕事柄、暗い場所は慣れている。

ダルキアンはそのまま走り出し、外へ脱出した。

*

一方、あの男は…

「はぁ…はぁ…メイトリックスがいるなんて聞いてねえぜ…！」

お情けで見逃されたサリーである。

彼は今二階に来ていた。

「クソッ、とりあえず武器の確保だ…あの野郎をぶっ殺してやる…！」

そう呟いた彼が足を踏み入れた場所、それは武器庫だった。

「はぁ…はぁ…」

カタッ…

その時、サリーの靴の先に何かが触れた。

「あ…？」

ドガアアアアン…！！

サリーのつま先に触れた物…それは、数分前にダルキアンが仕掛けたクレイモアだった。

しかも爆発の炎は他の火薬に引火し、更なる爆発を引き起こした。

そしてその爆発は最終的に、宮殿の1/3とサリーの身体を吹き飛ばしたのだった。

*

外のエクレールやゴドウィン、ダルキアンにユキカゼも爆発を確認していた。

四人は既に合流し、キャデラック前でメイトリックスを待っていた。

「勇者殿は!?!」

ユキカゼが声を上げる。

他の三人も、宮殿の入口を凝視している。

「あ、あれは…!」

入口を指さすエクレール。

彼女の視線の先には炎があがっている。

やがてその炎の中から、レオンミシェリを抱えたメイトリックスが現れた。

「勇者！」

「閣下！ご無事で！」

四人は満面の笑みを浮かべ、メイトリックス達に駆け寄った。

良い逃げ道だな、マヌケ（後書き）

サリーの台詞：作者の脳内では玄田版の田中亮一氏ではなく、屋良版の鈴置洋孝氏の声で再生されるのは何故だろうか…

7月7日は七夕の日（前書き）

日本では短冊に願い事を書くそうだが、俺だったら・・・

打倒！ハ・ティス！（ハ・ティスに勝てますように シュワ）

そっいえば水樹奈々さんの日でもあるよね。

7月7日は七夕の日

メイトリックスはレオンミシエリをキャデラックの後部座席に座らせた。

「閣下、お怪我はございませんか!？」

「足を捻挫しただけじゃゴドウィン。心配いらん」

そう言ったレオンミシエリは呆然と、燃え盛る宮殿を眺めていた。

「これで全てが終わったのか…」

エクレールも宮殿を眺めながら安堵のため息をついた時だった。

「お館様！勇者殿！あれを！」

ユキカゼが指さした先には、セルクルの大群がコンドル帝国に向かってきていた。

先頭のセルクルにはあの男が乗っている。

「あ…兄上!？」

エクレールがその男を見て声をあげる。

そう、ビスコッティ騎士団長のロランである。

「勇者殿――!!」

やがて宮殿の門をくぐったロランは、セルクルから降りてメイトリックスの前までやってきた。

「これはまた…」

「やることが派手だねえ」

変わり果てた宮殿を目の当たりにし、ロランや兵士達が啞然とする。

「…皆、宮殿を調べてくれ」

「はッ!」

兵士達は返事すると宮殿へと向かっていき、ロランがメイトリックス達の方を向いた。

「まだ誰が残っているか?」

「死体だけだ」

五年前カービーに言ったように、その一言をロランに放ったメイトリックス。

「それよりロラン、よくここまで来たな。ビスコッティの警備はいいのか?」

「我々は戦後の処理担当だ。警備は別働隊に任せてある」

ロランはため息をつくとき表情を緩め、笑顔を見せた。

「よくレオンミシエリ殿を助け出してくれた。ありがとう」

「なあと、勇者として当然だ」

メイトリックスも一安心し、ポケットから水筒を取り出して蓋を開け、口をつけた。

「……ふう。やはり故郷の味は格別だ」

飲み終えたメイトリックスはため息をつく。

それは彼の故郷、アメリカのウイスキーをベースにしたビスコッテイの酒で、水筒は彼の持参品である。

「勇者殿、ここは我々に任せてビスコッティにご帰還を」

「ありがとう。ではお言葉に甘えよう」

そう言ったメイトリックスがキャデラックに乗り込み、鍵を回した。

ブロロロロ…！

「すまないロラン。後は頼んだ」

ロランに礼を言ったメイトリックスはアクセルを踏み、ハンドルを回す。

キャデラックは方向転換し、コンドル宮殿に尻を向けた。

「エクレール、ゴドウィン、ダルキアン、ユキカゼ。出発するから乗れ」

「拙者はロラン殿を手伝うでござるから、先に戻ってかまわないでござるよ」

ダルキアンがメイトリックスにそう伝える。

「そうか。わかった」

ダルキアン以外の三人が乗り込み、ドアを閉めた。

「よし、では出発するぞ」

メイトリックスにアクセルを踏まれ、キャデラックが走り出す。

こうしてコンドル宮殿攻防戦は終結した。

*

コンドル帝国を後にして10分後、

（それにしても…コンドル帝国の核は何処へ消えたんだ…？）

考え事をしていたメイトリックスが何かに気づいた。

「……ん？」

「どうしたのじゃ？」

レオンミシエリが問う。

それと同時に、キャデラックがその場に停車した。

「…すまん、燃料切れた」

「何だと！？」

ゴドウィンが驚く。

「クソッ、ちよつと待ってろ」

シートベルトを外し、ドアを開けてキャデラックから降りたメイトリックス。

なんと彼はキャデラックの後ろに回り込み、車を押し始めたのだ。

「ふんッ！」

だが道は平地なので、思うように進まない。

（どうすればいいんだ…）

ひたすら押し続けるメイトリックス。

そんな時、空に小さな影が見えた。

「勇者様——!!」

声のした方を向くと、ミルヒオーレ専用のセルクル・ハーランが空を飛んでいた。

だがその背中に乗っていたのはミルヒオーレではない。

「…リコッタか!」

ハーランに乗っていたのはリコッタだ。

だが彼女の様子がおかしい。

ハーランが着地すると同時に、リコッタがメイトリックスに駆け寄ってきた。

「そんなに慌ててどうした?」

「ハア…ハア…た、大変であります勇者様…!」

リコッタは息を整えると、再び口を開いた。

「実は……コンドル帝国のハーティス大尉の部隊に、フィリアンノ城を占拠されたのであります！」

「な、なんだと!？」

メイトリックスや、車内にいた者達も驚きを隠せないでいた。

「さっき見た部隊はビスコッティへ向かっていたのか……くッ、私としたことが……！」

助手席のエクレールが拳を握り締める。

「いや、俺の責任でもある。ん……ということは……奴らが持っていた巨大な箱に核爆弾があるのか……！」

それなら全ての辻褄が合う。

「リコッタ、フィリアンノ城の状況はどんなだ？」

「メイド隊の方々や、兵士の皆さんは無事に逃げ出しております。ですが姫様が……姫様が……うう……！」

そこまで言ったりリコッタは両手で顔を覆い、その場にしゃがみ込んで泣き出してしまった。

（お姫様が人質か……クソッ、こうしてはいられん！）

メイトリックスは何かを思いつき、リコッタの肩に手を置いた。

「リコッタ。頼みがあるんだが、車の燃料を探してきてくれないか？」

「えっ…？」

リコッタがメイトリックスを見上げる。

「燃料切れで動かんだ。その間、ハーランを少し借りる。俺に何かあったらジェニーにすまないと言ってくれ」

そう言い放ったメイトリックスは、そのままハーランの方へと走っていた。

「勇者様！必ず…必ず姫様を助け出してくださいであります！」

リコッタやエクレール、ユキカゼがメイトリックスに希望の眼差しを向ける。

「勇者…」

後部座席の窓からレオンミシエリが顔を出している。

「ミルヒを…頼んだぞ！」

ハーランに飛び乗ったメイトリックスはレオンミシエリ達を向き、彼女らにグッドサインを出した。

「オッケイ！」

メイトリックスはそれだけ言うと、ハーランと共に飛び立っていった。

*

一方こちらはフィリアンノ城。

ミルヒオーレ以外のビスコッティ人は外へ追い出され、城の周りには人だかりができていた。

《…大変なことになっております！かの悪名高いコンドル帝国のハーティス隊が、ビスコッティ共和国のミルヒオーレ姫を人質にフィリアンノ城に籠城しております！》

ガレット側の実況者、フランボワーズもビスコッティに赴いていた。

《聞いた話によりますと、ハーティス達は国一つや二つを余裕で吹き飛ばすほどの爆弾を持っているとのことですよ！このような事態…どうなるのでしょうか！？》

*

「ミルヒオーレ姫、あっしから逃げれるとは思わないことさあ。まだ死にたくないっしょ？」

城内、ミルヒオーレを椅子に座らせて、何度も同じことを言い聞かせるハーティス。

「……」

対するミルヒオーレは黙ってハーティスを睨みつけている。

「ッハハハハ！そんなに怒らないでくださいよ。まあこつちも無闇に命を奪いたいわけじゃないんでさあ。あっしらは普通にビスコッティやガレットに戻りたいだけだ」

ハーティスは不敵に笑うと、一つの装置の蓋を開けた。

そしてその穴部分に、大きな鍵を差し込んだ。

「でももし断ったらこのキーを回す。こいつを回したら、ビスコッティにいる連中は全員死ぬ。あっしらも含めてな」

「え…！？」

思わず椅子から立ち上がるミルヒオーレだが、ハーティスは気にしていない。

「時間はたっぷりあるからよく考えてください。でもあんたらビスコッティやガレットを許すつもりはないでさあ。このまま表歩か

ないで暮らす位なら…道連れにしてやらあ…！」

それを聞いたミルヒオーレは力無く椅子に座り込む。

彼等が全員死を覚悟している以上、自分達の旗色が悪い。

（このまま…どうすることも出来ないのでしょうか…）

ミルヒオーレが希望を失いかけた、その時だった。

「申し上げます！」

一人のコンドル兵士が部屋に駆け込んできた。

「どうした？」

「コンドル帝国と連絡が取れません！」

兵士は慌てふためいている。

フィリアンノ城を制圧したと報告しようとしたのだが、何故か宮殿と連絡が取れないのだ。

「向こうの受話器が上がってんのか？」

「大変です大尉！」

今度は別の兵士が駆け込んできた。

「と、遠くから…コンドル帝国方向から何かが向かってきます!」

「貸せ!」

ハーティスはその兵士から双眼鏡を奪い取り、窓の外を覗く。

「…!あれは…!?!」

*

外のフランボワーズや映像板も、向かってくる者を捉えていた。

「おい、あれ…」

一人の兵士が声をあげる。

《あれはミルヒオーレ姫専用のセルクル・ハーランです!そして、その背中に乗っているのは…》

…勇者です！ビスコッティの勇者、ジョン・メイトリックスだあ
あ！！！！」

フランボワーズを始め、状況を見守っている者達が歓声をあげた。

映像板にはハーランに乗った、アサルトライフル一丁とナイフのみを装備したメイトリックスが映っていた。

7月7日は七夕の日（後書き）

展開的にはトゥルurライズ寄りですが、バトルシーンはイレイザー寄りにしていきたいと思います。

すいませんが作者の都合により、次回の更新は遅めです。

ハ・ティス！お姫様は関係ない！放してやれ！！（前書き）

用事が予定より早く片付いたので投稿します。

今回からメイトリックスvsハ・ティス部隊戦です。

ハ・ティス！お姫様は関係ない！放してやれ！！

「クソッ、ありや何なんでさあ！？」

ハーティスは双眼鏡を投げ捨て、拳を握り締める。

「外の兵達に迎撃させろ！大至急でさあ！」

だがその時…

ドンッ！

「うおッ！？」

部屋にいた部下が腰をさすりながら床に倒れている。

「…すみません大尉、屋上に逃げられました…！」

なんとミルヒオーレが彼に体当たりして逃げ出したのだ。

「なんで誰も見張ってなかったんでさあ！？もういい！キーを回せえ…！」

だが部下は気まずそうな表情を浮かべる。

「…彼女にキーを抜かれました…」

一方フィリアンノ城上空では、コンドル兵士達とメイトリックスが空中戦を繰り広げていた。

ダダダダダ！！

「ぐはぁー！！」

メイトリックスは無言で敵兵と交戦しており、たった今一人撃墜した。

元々フィリアンノ城上空には警備兵として五人配置されていたが、いずれも精鋭であり、メイトリックスを攪乱していた。

*

「見つけましたぞ姫様あー！！」

ハーティスはあつという間にミルヒオーレに追いつき、彼女を屋上の隅へと追い詰めていた。

だがミルヒオーレも負けてはいない。

先程奪ったキーを手に取り、ハーティスを牽制していた。

「私を撃つとこのキーを落としますよ！こちらへ来ないでください！」

流石にハーティスもギョツとし、足を止めた。

「わ、わかりましたよお！」

そう言い、拳銃を腰のホルダーにしまった。

「これでいいですかい？撃ちませんが、早くキーをあつしにくだせえ！」

まるで即席ラーメンのように簡単に作った笑顔を浮かべるハーティス。

「約束は守りまさあ！嘘じゃありませんぜ！？」

「信用出来ません！あなたのような酷い人の言うことなんか！！」

ミルヒオーレがそう叫んだ途端、ハーティスの表情からスウツと笑顔が消え、冷酷な顔つきへと変わった。

「…ナメてつと痛い目見るぜ。小娘よお…」

拳銃は手にしていないものの、今の彼からはとてつもない殺気が感じられる。

「あ…う…ああ…」

ミルヒオーレは怯え、目に涙を浮かべている。

「この国の領主だか何だか知らねえが、本気出したあつしに勝てるわけねえつしょッ!!」

そう叫んだハーティスは一気にミルヒオーレに掴みかかった。

「きゃああッ!!」

《た、大変です!ミルヒオーレ姫が捕まっています!!》

フランボワーズの実況を余所に、ハーティスは醜い笑顔を浮かべた。

「離して!!離してください!!」

「へへへ…アンタはこのまま、大勢のビスコッティ人の前で転落死するんだあ…!!キーはその後にも奪えばいいんだあからねえッ!!」

ドンッ!

ミルヒオーレの身体に衝撃が走った。

ハーティスがミルヒオーレの肩を突き飛ばしたのだ。

「え…」

「空飛びたいっしょ?」

ハーティスの言葉など耳にも入らず、ミルヒオーレは地面へと吸い寄せられていく。

「あ…いや…助けて…」

落ちていく彼女の脳裏にはただ一人の男の姿があった。

「…ジョン…助けてジョオオオン…！」

ガシッ！

その時、目をつぶっているミルヒオーレの叫びに応えるように何者かが彼女の手を掴んだ。

「お姫様あッ…！」

聞き慣れた声を耳にし、ミルヒオーレは目を開ける。

「…ジョン…！」

《ナイス！ナイスタイミングです！！流石勇者ジョン、精鋭部隊を倒してミルヒオーレ姫のピンチに駆けつけたヒーローだああああ！！》

「わあああああああ!!」

住民やビスコッティ兵士達から歓声があがる。

「大丈夫かお姫様、怪我はないか!？」

メイトリックスはミルヒーレを軽々とハーランの上へと引き上げた。

「はい…ジョン、助けに来てくださったんですね…!」

「ああ。レオンミシエリもさっき助けたし、あとは君だけだ」

レオンミシエリの無事を聞き、胸をなで下ろしたミルヒーレ。

彼女は涙を流し、ジョンの登場を喜んだ。

「遅いですよ…てつきり戻らないかと…」

「道が混んでいた。だが必ず君のところへ戻る。そして勇者である限り、俺はずっと君を守り続けるさ!!」

そう言ったメイトリックスはミルヒーレを抱き寄せ、ハーティスを睨みつけた。

「奴がハーティスか…」

「はい。ジョン、これが爆弾のキーです」

ハーティスから奪い取ったキーを渡すミルヒオーレ。

メイトリックスは大きな手で、それを受け取った。

*

「奴がメイトリックス大佐かあ……」

フィリアンノ城屋上にて、ハーランに乗るメイトリックスを目視するハーティス。

「サリーの奴が言ってたように強そうな奴でさあ。だが……」

バツ！

「このコンドル帝国最強のハーティスに……勝てるわけないっしょお
おおッ……！」

ハーティスはそう叫びながら翼を羽ばたかせ、メイトリックスに向かっていった。

「こっちに來ますよジョン！」

「着陸は暫く不可能だな…お姫様、しっかり掴まっけてくれ。落ちるなよ！」

メイトリックスの指示を受け、ミルヒオーレは彼の腰に抱きついた。防弾ジャケットを脱いだメイトリックスは、ミルヒオーレにそれを被せた。

「よしハーラン。奴から逃げ回れ！」

ハーランはコクンと頷き、翼を羽ばたかせてその場から移動した。

それと同時にハーティスが腰のホルダーから拳銃を抜き取った。

パン！

当然ながら移動しているメイトリックスに当たるはずもなく、弾は外れた。

「待てよ大佐！ぶつ殺してやつからさあ！！」

マシンガンを構えたハーティスは、そのまま引き金を引いた。

ダダダダダダダ！！

「あいつめ…！」

メイトリックスはミルヒオーレを庇いながら、自らもアサルトライフルを装備した。

ドドドドドドドドドド…！

だがハーティスも伊達に大尉という階級ではない。

彼はメイトリックスの正確な射撃を避けたのだ。

「…流石レオンミシエリと互角だけのことはあるな。このままでは…」

お互い弾が当たらず、根比べがずっと続く。

だがそのうち、メイトリックスのアサルトライフルの弾が切れてしまった。

「チツ、弾が…ハーラン！城の隣の塔に寄ってくれ！」

メイトリックスの指示通り、ハーランは塔へ近づいていった。

「ジョン、何をする気ですか！？」

するとメイトリックスは足をあげ、思い切りハーランの背中を蹴った。

「はあああああッ!!」

「ジョン!？」

《と、飛んだあ!？勇者ジョン、塔に飛び移りました!!》

(…やはり塔の中には入れなかったか…!)

そう、メイトリックスは塔の中に入り、新たな武器を装備するつもりだったのだが、今の彼は塔の側面にしがみついている。

「大尉!あの男ですか!？」

なんとタイミングの悪いことに、ハーティスの部下達が武装し、戻ってきたのだ。

「そつだ!ぶつ殺せえい!!」

ダダダダダダダ!!

ドドドドドドドドド!!

彼らはメイトリックスに対し、一斉射撃を開始した。

「ま、まずい!!」

メイトリックスは急いで塔を登るが、思うように動けない。

だが幸い、コンドル兵士達は銃器の扱いに慣れていないので、弾は全てメイトリックスを避けていった。

「へつたくそお！銃寄越せ！！」

部下に業を煮やしたハーティスは、部下からマシンガンを奪い取った。

「よし、あつしが撃つ！」

ダダダダダダダ！！

今度はハーティスも加わり、メイトリックスはますますピンチに追い込まれた。

だが…

ヒュン…！

「ぐああッ！？」

その時何処からか矢が飛んできて、一人コンドル兵士の胸を貫いた。

彼はその場で絶命し、地面へと落下した。

「な、なんだ!？」

困惑するハーティス部隊だが、今度は沢山の矢が彼らを襲った。

「何なんでさあ!？」

「大尉! あいつらッスよ!!」

部下が指さした先、そこはフィリアンノ城の展望台だ。

「あいつら...!」

塔の壁のメイトリックスも、その正体を確認した。

「我らガレット獅子団領!」

金髪の少女が口を開く。

「ガウ様直属親衛隊!」

関西弁混じりの少女もそれに続く。

最後に黒髪の少女が無言で真ん中に立ち、三人でポーズを決めた。

「『『ジェノワーズ！』』」

そう、メイトリックスの窮地を救ったのはガレット領国のジェノワーズだった。

その後ろに王子である少年・ガウルもいた。

「へへっ、^{ジェノワーズ}組合をなめんじゃねえよ！！」

ハ・ティス！お姫様は関係ない！放してやれ！！（後書き）

ジングル・オール・ザ・ウェイの玄田版が収録されたBDが発売されるそうですが…

作者はBDプレイヤーを持ってない！！

おめでとう、ハ・ティス達は消去された（前書き）

今回で決着です。

強さ基準は、メイトリックス>ハ・ティス>>越えられない壁>>
ベネットです。

おめでとう、ハ・ティス達は消去された

ハーティス達がジェノワーズに氣を取られている隙に、メイトリックスは塔の壁を這い上がり、内部へと入り込んだ。

その塔は、リコッタがメイトリックスのために作った武器を保管してある施設の一部で、現在は使われていない。

だが…

「…？」

武器庫の扉を開けたメイトリックスは愕然とした。

なんと武器庫が空っぽなのだ。

（奴らに持ち出されたか…）

だがここで諦めないのがメイトリックス。

彼は武器庫に残されていた斧を手に取り、塔の入口のすぐ横に立った。

*

その頃外では、

「あいつ只者じゃねえでさあ……」

ハーティスはメイトリックスの予想以上の強さとしぶとさに、恐怖しながらも塔を凝視していた。

（あいつなんざ怖かねえでさあ……コンドル帝国最強のあつしに勝てるもんか……！）

だがいつまで待っても、塔は音沙汰無しだ。

「……見てこいカルロ」

しびれを切らしたハーティスが指示を出す。

カルロと呼ばれた兵士は頷くと、恐る恐る塔に近づく。

ちなみに彼はアリアス一味のカルロとは別人である。

カルロが塔に足を踏み入れた時、メイトリックスは彼の腹部に斧の刃先を叩き込んだ。

「ぐああッ！？」

絶命したカルロから散弾銃とナイフを奪い取ったメイトリックスだが、そのタイミングをハーティスは見逃さなかった。

「いたぞお！！いたぞおおおおおおお！！うあああああ
ああああ！！！！いたぞおおおおおおお！！！！！！」
「！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド！！

絶叫しながら、ハーティスは塔に向かってマシンガンを連射する。
もはや一種の錯乱状態である。

だがメイトリックスはそれを早めに察知し、塔から身を乗り出した。

「はあああッ！！」

銃弾を全て避け、塔から城の屋上へと飛び移るメイトリックス。

「ハア…ハア…い、今でさあ！！いけえええ！！！」

ハーティスの指示を受け、部下達が一斉に屋上目掛けて向かった。
つた。

「…！！」

このままではメイトリックスは的である。

だが…

カチッ！カチッ！

「え…」

コンドル兵士達が引き金を引くが、銃弾は発射されない。

先程の一斉射撃で弾を撃ち尽くしたのだ。

「ふんッ！」

ズドオン！！

すぐさま散弾銃をかまえ、コンドル兵士達に向けたメイトリックスは引き金を引いた。

ズドオン！！

「ぐはぁー！！」

ズドオン！！

「へぎゃあ！？」

ズドオン！！

「アツーーーー！！」

何発も発砲し、コンドル兵士達全員を蜂の巣にすることに成功した。

（よし、これであとはハーティスだけか…）

だがメイトリックスの読みは甘かった。

「…！？」

息絶えたコンドル兵士のすぐ後ろで、ハーティスが拳銃をかまえていたのだ。

「おイタはそこまでさあ！…」

パン！！

銃弾はメイトリックスの右腕、つまり利き手を貫いた。

「ぐっ…！」

メイトリックスは傷口を手で押さえるが、大量の血が溢れている。

「ジョン…！死なないでください…！」

地上に降りたミルヒオーレが叫ぶ。

もはやフランボワーズも実況を忘れ、勝負の行方を見守っていた。

メイトリックスは急いで胸ポケットからナイフを抜こうとするが…

ジャキッ！

「チェックメイトでさあ」

ハーティスがメイトリックスの額に拳銃を突きつけていた。

「もう観念した方がいいでさあ大佐。あんたはよくやったよ、あつしの部下を全員倒しちゃったんでさからね」

勝利を確信し、ニヤリと笑うハーティス。

「ま、あいつらはただの力カシでさあ。あつしやあんたならまばた

きする間に皆殺しにできさあ……ッへへへ！気分いいでさあア
ハハハ！これから死ぬ気分はどうでさ大佐あ！？」

「いや、まだだ…」

絶望的な状況の中、メイトリックスもまた自身の勝利を確信していた。

「ハア？」

「…まだお前を殺していない」

「ッハハハハハ！！この状況下で何言ってるでさあ！？あんたが勝つには、そのナイフを抜かなければなんねえ！！だがあつしは指をちよつと動かすだけ！！負け惜しみ言ってるじゃねえでさあ！！ッハハハハハ！！」

ハーティスは狂ったように笑う。

「ま、最後でさあからね。一応質問しとくよ。いつになったらあつしを殺す？」

「今だああッ！！」

そう叫ぶやいなや、メイトリックスは地面に腰をつけ、足でハーテイスの拳銃を蹴飛ばした。

カーン！

彼の苦肉の策は成功し、拳銃は城の裏庭へと落ちていった。

「……ッてめええええええ！」

武器を失ったハーティスがメイトリックスに拳を振るう。

だがメイトリックスは彼の鳩尾に頭突きを食らわせた。

「ごはあ
ああッ
!!」

悶え苦しむハーティスだが、メイトリックスは容赦しない。

ズバァッ！！

彼の後ろに回り込み、抜き取ったナイフで翼を斬り落としたのだ。

そして…

「…ぶっ飛べ!!」

ドスッ!

メイトリックスの渾身の肘打ちが炸裂する。

「グオワアアアアア…」

それをもろに食らったハーティスは宙を舞い、先程の拳銃と同様に裏庭へと吸い込まれていった。

やがて、ベキツという乾いた音が聞こえてきた。

メイトリックスが裏庭を覗き込むと、首の骨が折れて息絶えたハーティスの姿があった。

「地獄に落ちろハーティス…」

《…勝った…勝ちました！！この戦い、勇者ジョンの勝利です！！》

フランボワーズの宣言と同時に、映像板にメイトリックスの姿が映る。

その時、城の外にいたビスコッティ兵士達やメイド隊、住民達が一斉に歓声をあげた。

「「「わあああああああああ！！！！」」」

「ありがとうございますジョン…ビスコッティと…ガレットを救ってくださって…！」

ミルヒオーレは安堵のため息をつき、地面にへたり込む。

ジェノワーズの三人は抱き合い、ガウルはガッツポーズをとった。

キキッ…！

途中で置き去りにされたコマンドー部隊のキャデラックも、燃料の補給を終えてようやくビスコッティに帰還した。

ちなみに運転しているのはゴドウィンである。

説明書を読んだらしい。

「勇者殿…勝ったのでござるね…！」

「さすが勇者様であります！」

ユキカゼとリコッタがメイトリックスの勝利を確信する。

「勇者…お前がナンバーワンだ」

助手席から降りたエクレールは、どこかの王子のような台詞を呟く。

彼女もようやくメイトリックスを認めたようだ。

ビスコッティ、ガレットの両国民はメイトリックスの勝利を心の底から喜んだ。

あの悪名高いハーティス部隊が全滅し、危険なコンドル帝国が壊滅したのだ。

そう、四人のコマンドーと一人の勇者によって…

かくしてレオンミシエリ誘拐事件、並びにフィリアンノ城籠城事件は解決し、ビスコッティとガレットの両国壊滅の危機は去った。

しばらくの間、両国からの拍手喝采が止まなかったという。

おめでとう、ハ・ティス達は消去された（後書き）

自分で書いててあれですが、ハ・ティス「でさでさ」五月蠅いす
なw

まったく（自分自身が）お笑いだ。

おかしいな、リコッタどうしたの？ひどく泣いてるけど、病気なの？（前書き）

リコッタは元気に研究してるわ。今どこ？

投稿に思ったより時間がかかった…俺を殺れ

おかしいな、リコッタどうしたの？ひどく泣いてるけど、病気なの？

ハーティス部隊を撃破して二日後、ビスコッティにてミルヒオーレのコンサートが開かれることとなった。

会場には出店が沢山並んでおり、住民や兵士達で賑わっている。

メイトリックスやビスコッティの者達も、その出店巡りをしていた。

「勇者様、ありがとうございます！」

「約束だからな」

メイトリックスに肩車されたりリコッタが、ソフトクリーム片手に笑顔を浮かべている。

「それに君にはだいぶ世話になったからな。感謝している。それより、コンドル帝国の作った装置はどうなったんだ？」

「どうやら宮殿の爆発で、一緒に壊れてしまったでありますよ」

その光景を後ろで見ているダルキアンとユキカゼは酒の瓶を持っていた。

「まるで…親子のようじゃないな」

「それで御座いますね、お館様」

*

やがてリコッタは他の学院の者に呼ばれ、会場を後にした。

「大変だなりコッタも。ま、俺はお姫様のコンサートを待つか…」

そう呟き、メイトリックスが草の上に座り込んだ時だった。

「おい、勇者」

声をかけられ、メイトリックスが振り返ると、そこにはエクレールが立っていた。

「エクレールか。どうした？」

「の…飲め。私の奢りだ」

メイトリックスの横に座り、彼にグラスを手渡すエクレール。

次に彼女は持っていたビール瓶の栓を開け、メイトリックスのグラスに注いだ。

「ビールでも飲んでリラックスしろ」

「ああ、すまん」

メイトリックスはビールを一気飲みし、ため息をついた。

「それにしても、二日前はよく頑張ったな」

「いや、一番頑張ったのはお前だ勇者。姫様とレオ閣下をよく助けてくれた。おかげで、お互い仲直りできたようだ。心から感謝する」

そう言ったエクレールは珍しく、ニコツと笑った。

「よう!」

後ろから声がかかり、メイトリックスとエクレールが振り返ると、ガウルとジェノワーズが笑いながらこちらを見ていた。

「勇者、こないだはお疲れさん!」

「「「お疲れ様でした!」」」

「君達か…こないだは助かったよ」

素直に礼を言うメイトリックス。

「いやいや気にすんなって!第一、姉上を助けてくれた男を見殺しにできるわけねえだろ!それよりそろそろ始まるぜ!」

やや興奮気味のガウルが、メイトリックス達の横に座って舞台ステージを指さす。

ステージは様々な色のライトで照らされ、派手さを増している。

「お、出てきたか」

そしてすぐに、ステージの舞台裏からピンク色のドレスを着用し、髪をおろしたミルヒオーレがマイク片手に登場した。

*

やがて数時間が経過し、コンサートは無事終了した。

「みんなー！今夜はありがとうー！」

観客達が歓声をあげながら、ミルヒオーレに拍手を浴びせる。

「やつぱりいいものだな、お姫様の歌は」

「あつたりまえよ！ハハハハハ！」

ガウルのテンションは最高潮となり、声も大きくなっている。

彼以外のガレット人も盛り上がっていた。

「ヘイヘーイ・・・女だ、悪かねえぜ」

「ん？何する気だ？」

「俺達に何か見せてえんだろ」

「ストリップかな？」

バシン！バシン！

「構わないで、大声出すわよ？」

「「ゴウエアア・・・」」

「今夜暇かい？」

「クソして寝な」

「ああどうも。最近のねーちゃんキツイや」

中にはナンパに失敗する者、または制裁を食らってけもの玉になる者達もいた。

「フロニヤルドの祭りは素晴らしいな...！」

メイトリックスも、いや全ての者が笑顔だった。

ただ一人を除いては…

*

翌日、ビスコッティにてパレードが行われ、メイトリックスは出席した。

「……」

出席といってもセルクルに乗り、市街地を歩きまわるだけである。

彼は性格上、パレードやパーティなどの催し物は苦手なのだ。

数時間後パレードは無事終了し、メイトリックスはフィリアンノ城の自室に帰還した。

*

「……」

戻った彼は自室のベッドで横になっていた。

（疲れたが、パーティじゃないだけマシだな。あのような場所で飯を食うと余計に腹が減る……）

ちなみにメイトリックス曰く、祭りはパーティと違って堅苦しくないところがいいとか。

コン！コン！

その時、部屋にノックの音が響き渡った。

「開いているぞ」

ガチャ！

ドアを開け、入ってきたのはリコッタだった。

「ん？リコッタか、どうした？」

「お邪魔しますであります。勇者様のご帰還方法…判明したのであります…」

笑顔を保とうとするリコッタだが、目が笑っていない。

「そうか…まあ折角来たんだ。座れ」

それを察したメイトリックスはリコッタをベッドに座らせ、自分は机に移る。

「予定通り、三日後の朝に元の世界に戻れるであります」

「それはいいんだが、なにかあったのか？」

「一度送還された勇者は、二度とフロニヤルドに来られないって条件があるのであります」

それを聞いたメイトリックスの動きが一瞬止まった。

「…そうか…」

「それから…フロニヤルドで得た物は、何も持ち帰れないという条件もあって…」

涙声になりつつも説明するリコッタ。

「…これは品物だけでなく、知識や経験も該当するのであります…フロニヤルドで過ごした日々の記憶も…送還の際に消えてしまうと…」

「そうだったのか…」

ため息をつくメイトリックス。

初めて参加した戦、ミルヒオーレ奪還戦、キャデラックの入手、騎士団に混じったの訓練、オンミツ部隊との休息、リゼル達メイド隊に無理やり入れられた風呂、ミルヒオーレとお茶会、レオンミシエリ奪還戦、サリーとの再会、ハ・ティス部隊との死闘…

殆ど戦ってばかりだが、彼にはどれも大切な思い出である。

「…自分が…不甲斐ないであります…！」

リコッタは大粒の涙を流し、スカートの裾をギュツと握り締める。

「自分は…きつと軽く考えていたのであります。難しくても何とかなる、こんな悲しいことにはならない、って…！」

「君のせいじゃない」

メイトリックスはリコッタの頭を撫で、彼女を宥める。

「でも…でも勇者様…！姫様やみんなと仲良くなって…自分とも一緒にいてくれて…」

「……」

「なのに…こんな結末、嫌でありますッ！勇者様に…フロニヤルドのこと、みんなのこと、忘れてほしくないであります…！ずっと…ずっと一緒にいたいであります…！…！」

涙をこぼしながら、リコッタは立ち上がる。

「…そうだな。二度と会えないのもつらいし、忘れるのもつらい。だが、必ず戻ってくるぞ!」

キリッとした表情を浮かべ、リコッタに笑ってみせるメイトリックス。

「フフッ!」

そんな彼に負け、リコッタはつい吹き出して涙を拭いた。

「ところでリコッタ、この話を知っているのは俺だけか?」

「はい…研究員の皆以外では…」

「そうか…わかった。そうだ、ノワールからこれを貰ったんだが…よかったらいるか?」

そう言つてメイトリックスが差し出した物、それは…

「…レア物のダッシュUMAN人形でありますか!?」

「ああ。武器はジョーヌから、電池はベールから貰った。どちらも装着済みだから、六つの台詞を喋るぞ。こんな風にな」

《いくぞ!ダッシュユタアイム!!》

「凄いです！一度、この人形を研究してみたかったです！」

先程の涙は消え失せ、そこには満面の笑顔を浮かべるリコッタの姿があった。

「元気になってよかったよ、リコッタ。やっぱり君は笑顔でなくちゃならない」

「勇者様…ありがとうございます！」

メイトリックスの気遣いに、胸がいつぱいになるリコッタであった。

「とりあえず、さっきの話は誰にもしないでくれ。悲しい別れはご免だからな」

「了解であります！では、お邪魔しましたであります！」

そう言い、メイトリックスに頭を下げたりコッタは部屋を後にした。

おかしいな、リコッタどうしたの？ひどく泣いてるけど、病気なの？（後書き）

ジェノワーズにマニア疑惑が浮上した…俺を殺れ

あとターミネーター2の「人間がなぜ泣くか」の台詞を入れたかったですが、メイトリックスは人間ですし、涙流せるんで入れませんでした。

次回か、次々回で完結になると思います。

ご意見、ご感想お待ちしています！

記憶なんかもういない、うちに本物の勇者様がいらしたんですから！（前書き）

メイトリックス「いやだめだろw」

途中で本編と流れが違ってきますが、ご了承ください。

記憶なんかもういない、うちに本物の勇者様がいらしたんですから！

リコッタから送還の際の問題点を聞いてから翌日、メイトリックスはダルキアンとユキカゼの所を訪れていた。

ハ・ティスを倒して以降はロクに言葉を交わせなかったので、ダルキアンが呼び出したのだ。

「勇者殿、わざわざすまぬな」

「かまわん。俺も挨拶に行こうと思っていたところだしな」

二人が縁側に腰掛けたのを見計らい、後ろからユキカゼが現れた。

「勇者殿、これらをお返しするでござる」

ユキカゼの手には、かつて護身用のために渡した拳銃があった。

「まだ持っていたのか」

「当然でござる！勇者殿からお預かりした物で御座いますから！」

笑顔でそう言うユキカゼに、メイトリックスも自然と笑顔になっていた。

「そうか…だがそれは二人にあげよう」

「えッ!？」

驚くユキカゼに、思わず目を見開くダルキアン。

「…いいのでござるか？」

「ゴドウィンとエクレールにもあげた。それに俺はあと二日で元の世界へ帰る。こんなことを言うのは柄じゃないが、俺がこのフロニヤルドに来たという記念として持っていてくれ」

そう言ったメイトリックスは、出された水羊羹に手をつけた。

「…俺の国にはない菓子だな、何という物だ？」

「羊羹でござるよ!」

「ヨウカンか…ジェニーにも食わせてやりたいな」

「勇者殿は本当に娘さん思いでござるな」

しばらく彼女らと雑談したメイトリックスは、ガレットに顔を出すと言ってその場を後にした。

*

数時間後、ガレット獅子団領国付近。

「おいジョン！」

セルクルに乗ったメイトリックスに、何者かが後ろから声をかけてきた。

「ガウルにジェノワーズか。ちょうどそちらに行こうと思ってたんだ」

「そっか、じゃあ来いよ！」

ミオン砦に移動した四人はガウルの部屋に入り、ガウルとメイトリックスが腕相撲をすることになった。

ドンッ！

「いでいでいでッーーーーー！！」

あっさり惨敗し、悲鳴をあげるガウル。

「おおー！流石ジョンさん！ガウ様をこつもあっさりと！」

ガウルは年齢の割に腕力はある。

だが筋肉モリモリマッチョマンの変態であるメイトリックスにとつて、ガウルに勝利することなど温かいバターを切るより簡単なことだった。

「どうした、ガレットのデスクワークで鈍ったのか？あ？」

「くっそくっそ！――！やっぱジョンに力で勝つのはムリだなあくくく！」

そこでベールがジューズ入りのグラスを五本持つて戻ってきた。

「今度は両手で来いよガウル。俺は肩腕だ、お前でも勝てる。それとも怖いのか？」

「言いやがったなジョン！テメエなんか怖かねえ！！」

そう叫んだガウルがメイトリックスに両腕を伸ばした時だった。

「あッ……！！」

突如ベールがつまずき、グラスが宙に放り出された。

「うわ！」

「……！！」

それに気づいたメイトリックスはいち早く机から立ち上がり、ベールを抱えて床に伏せた。

ガシャアアン！！

グラスはすべて砕け散り、中のジュースはガウルにのみ降り注いだ。

「大丈夫か？」

目をギュツと瞑るベールに尋ねるメイトリックス。

「え…ええ…でもジョン様、ちょっと大胆ですね…」

目を開けたベールは若干頬を赤らめ、ノワールとジョーヌはそんな二人を茫然としながら眺めている。

「あ、いやすまん。だがあの角度では、ガラスの破片は君の方へ飛んでいたんだ」

メイトリックスの言うとおり、彼の背中には無数の小さな破片がくっついていた。

「あ…ありがとうございます、ジョン様…お怪我は…？」

「大丈夫だ。とにかく、被害がなくてよかった」

頷くジェノワーズだが、ガウルだけは首を横に振った。

「よかねえよ！ベール！テメエまたやったなこの野郎…！」

怒ったガウルは、謝りながら泣き叫ぶベールを追いまわし続けた。

（これで…恐らくガウル達と戯れるのも最後か…）

*

翌日、そのままガウルの部屋に泊ったメイトリックスは、その足でレオンミシェリの部屋へ向かった。

コンーコンー！

《開いておるぞ。誰じゃ？》

ガチャ！

「俺だ。ジョン・メイトリックスだ」

メイトリックスはそう言いながらレオンミシェリの部屋へ入った。

「筋肉勇者か。何の用じゃ？」

「いや…俺は明日元の世界に帰るから、挨拶しておこうと思ってな」
するとレオンミシェリは少し俯き、ため息をついた。

「ハア……そうか。里帰りするとは聞いておったが、明日とは随分急じゃの」

「ああ…突然すまなかった。色々世話になったな」

だがレオンミシエリはすぐに表情を変え、メイトリックスの方を向いた。

「…いや、世話になったのはワシの方じゃ。ミルヒとの仲を戻せたのも、ガレットやビスコッティに平和が戻ったのもお主のおかげじや。本当にかたじけない」

「俺は勇者だ。それもお姫様のな……すまん、邪魔したな」

「ああ、また来るがよいぞ勇者」

片手を挙げて部屋を後にするメイトリックス。

多くを語らない彼にレオンミシエリはますます感謝の念を抱く。

「ミルヒがお主を勇者として選んだ理由…ようやくワシにもわかったぞ」

*

数時間後、フィリアンノ城に戻ったメイトリックスは、ユキカゼと

エクレールに連れられて大広間のような場所へ連れてこられた。

そこには大勢の兵士や城で働いている者達が集まっていた。

（パーティーか…？それなら勘弁してほしいところだが、もう最後だからな）

「…何だここは？俺が入っていい場所なのか？」

「当然だ。でなければ連れてくるか」

「でござる…！」

そして部屋の中央まで来たユキカゼが、

「みなさーん！勇者ジョン、ご来場でござるよ！」

パチパチパチ！！

周りの兵士達が一斉に拍手をメイトリックスに浴びせる。

だが中には何故メイトリックスに拍手するのかわからない者もいた。

「何が始まるんです？」

「“ありがとう勇者様お食事会”だ」

そんな中、舞台の上に立ったミルヒオーレが口を開いた。

「えー…フィリアンノ城の皆さん。本日緊急連絡でまわした通り、我が国や隣国の危機を救ってくれた勇者ジョンが…明日の朝、元の世界にお帰りになります。ビスコッティとガレット両国の戦を、華やかに彩ってくれた勇者ジョンの活躍…それはもう、皆さんご存知のことかと思えます」

（お、俺のために…？）

「今回は里帰りということで一度ご帰宅されますが、きっとまたすぐ来てくれると信じています。では本日の主賓、勇者ジョンに一言お願いしたいと思います！」

「オ…オツケイ！」

そう言つて親指を立てたメイトリックスは、アメリカからマイクを受け取ると舞台上上がった。

「そうだな…俺は元の世界では、特殊部隊を辞めて隠居生活を送っていた。だがお姫様に勇者としてここに呼ばれ、ガウル殿下やレオンミシェリ閣下と戦ったり、このフロニヤルドの命運を左右するともいえる出来事にも立ち会った。最初は正直言つてよくわからなかったが、俺はここでの生活が段々と好きになっていったんだ」

今は全員がメイトリックスの話を黙って聞いている。

「俺は、皆にとっても感謝している。俺の窮地を救ってくれたガウル

殿下とジェノワーズの皆。コンドル帝国との決戦の際…俺を信じて
ついてきてくれた、ブリオツシュ・ダルキアン頭領、ユキカゼ・パ
ネトーネ筆頭、ゴドウィン・ドリユール將軍、エクレール・マルテ
イノツジ親衛隊長。武器やキャデラックの整備を担当し、俺が戦い
やすいようにしてくれたリコッタ・エルマール主席。俺を召還して
くれた、ミルヒオーレ・F・ビスコッティ姫。フィリアンノそして、ここにいる
皆…今日まで本当にありがとう。もし……またフロニヤルドにピン
チがあったなら、俺は必ず戻ってくるぞ。I'll be back
k！
」

メイトリックスが言い終わると、全員が拍手を浴びせた。

リコッタが少し悲しげな表情を浮かべているが、彼女以外は皆笑顔
だ。

（嘘をつくのは慣れているが…少々心が痛むな…）

本当のことを言えないメイトリックスの心は、罪悪感で一杯だった。

記憶なんかもういない、うちに本物の勇者様がいらしたんですから！（後書き

DOG DAYSの二期が決定したそうですね。

ストーリー次第では、二期の話も書くかもです。

次回で最終回です。

もう会うことはないでしょう(前書き)

シリアスな最終回なんで、コマンドーネタは少なめです。

ちなみに作者はアメリカのドル単位を日本円に換算できません。

もう会うことはないでしょう

ついにビスコッティの勇者、ジョン・メイトリックスが元の世界に帰るときがやってきた。

資料室にてリコッタは一人、一心不乱に資料を読み漁っていた。

その瞳には涙が浮かんでいる。

（まだ…もう少し…あともう少し…待つてほしいであります…）

そう、リコッタはメイトリックスがフロニヤルドでの記憶を失わないうちに、誰も悲しい思いをしないように必死で方法を探していた。

（このページをめくれば…次の資料を読めば…見つかるかもしれな
いであります…だから…）

「…リコッタ」

そんな彼女の前に、そのメイトリックスがやってきた。

だが彼の顔を見た途端、リコッタの瞳から涙がこぼれ落ちた。

「ごめんなさい…ごめんなさいであります…」

「リコッタ…？」

「見つけれなかったであります…やっぱり自分は、駄目だったであります…」

だがメイトリックスは静かに微笑み、リコッタの頭を撫でた。

「気にするな。お前は…こんなに沢山難しい本を読んでくれたじゃないか。もう充分だよ」

「勇者様…」

「そうだ忘れていた。リコッタ、君にこれをあげよう」

何かを思いだしたメイトリックスは、ズボンのポケットから紫色の小さな箱を取り出した。

「俺が山で仕事をするとき、持ち歩くラジオだ。これなら分解できるんじゃないか？」

だがリコッタはラジオを手に取り、涙を流しつつも笑顔を浮かべた。

「分解なんかしないであります…大事にとっておくであります…」

「本当に世話になったな…必ず戻ってくるぞ」

大きな手でリコッタと握手したメイトリックスは、そのまま資料室を後にした。

*

その後メイトリックスはエクレールとともに、ミルヒオーレの待つ召還台へと向かっていた。

「まったく、最後まで貴様のお守とはな！」

「そうばやくな。ま、最初の方は俺も迷惑かけっぱなしだったからな……」

再び沈黙が流れる。

メイトリックスもエクレールも何も言わない。

「……なあ、勇者」

先に沈黙を破ったのはエクレールだった。

「なんだ？」

「お前からもらった拳銃……返さなくてもいいのか？」

そう言った彼女の手には、コンドル帝国との決戦前に渡した拳銃が握られていた。

「……それはお前にやると言っただろう。どうせ30だ」

「お前の世界でいう……30ドルか？」

「チョコレート30個だと思うか？ドルに決まってる。それはともかくとして、その銃はお前の物だ」

「ま…まあ預かっておく」

エクレールはメイトリックスから顔を背けながら、拳銃を懷に仕舞った。

「やはり…送還されたら、もうフロニヤルドには来られないのか？」

「…ああ」

隠し通しても無駄だと判断したのだろう。

メイトリックスはあっさり打ち明けた。

「よくわからんが、記憶が無くなるらしい。ここで過ごした日々や、お前達と共に戦ったことも…」

「…そうか」

俯くエクレール。

「いつ気づいた？」

「リコの様子を見ていれば誰でも気づく…しかし、来るときは簡単だと聞いていたが、帰るときにはそんなことになるとはな、馬鹿げた話だ。こんな酷い話は流石の私も初めてだ」

「まったくだよ、チョー最悪だ。オレオレ詐欺が可愛く思える」

二人が話している間にも、セルクルはどんどん進んでいく。

「だが俺は忘れるつもりは毛頭ない。頭をかち割ってでも思い出すさ」

「そうか…」

やがて召還台付近に到着し、メイトリックスはセルクルを降りた。

「じゃあな。また…来れば来るさ」

そう言ったメイトリックスはエクレールに背を向け、召還台へと歩き出した。

*

数分後、メイトリックスは召還台の前に立っているミルヒオーレの姿を見つけた。

「お姫様！」

「ジョン…」

ミルヒオーレも、メイトリックスに気づいたようだ。

すると彼女の隣にいた犬、タツマキがメイトリックスに駆け寄ってきた。

「タツマキ、お前もいたのか」

「はい、お見送りをしたいって」

するとタツマキはお座りし、メイトリックスにお手をした。

「そうか。ありがとうな、タツマキ」

「待つてる間に、儀式の準備は済ませてあります。時間がきたら、来たときは逆にここからジョンは空に昇って…元の世界に帰ることが出来ます」

ミルヒオーレが青い空を見上げる。

「そうか…」

そう返事したメイトリックスは、ふとミルヒオーレの方に目をやる。

彼女の横顔は、どこか悲しげだった。

やがて召還台に上がり、ミルヒオーレはメイトリックスと向かい合った。

「来てもらったのは、ついこないだのことはずなのに…何だかもう、随分昔のことみたいです」

「ああ」

「ここでジョンと会って、勇者になっってもらって、助けてもらって…色々なことがありました」

涙声になるミルヒオーレ。

気丈に振る舞っていても、やはり一人の少女なのだ。

「でも何より…ジョンが来てくれて、ジョンといられて…楽しかったです！すごく…すごく！」

顔には出していないものの、その言葉は彼の心に大きく残った。

「俺も…君に呼んでもらって、とても楽しかった」

「絶対に…また会えますから！私達のこと…忘れないんですから！」

「ああ…そうだな」

涙を流すミルヒオーレの頭を撫でた時、紫色の光が突如メイトリックスを包み込んだ。

「…ジョン！」

だがメイトリックスは口を開かず、空高く昇っていく。

（すまないお姫様…俺だって本当はまたここへ来たい。だが…）

二人の距離がだんだん離れていく。

「大好きです！ジョン！」

（もっ…会うことはないでしょう…）

メイトリックスがそう思ったと同時に、彼の姿が完全に消えた。

「うっ…うっう…グスッ…」

誰も居ない召還台で一人、ミルヒオーレは泣き崩れた。

*

アメリカ某所、山奥の一軒家に一人の少女が近づいていた。

少女の名はジェニー・メイトリックス。

ジョン・メイトリックスの一人娘だ。

「ふう、ようやく着いた」

そう呟いた彼女は勢いよく玄関を開けた。

「パパ！ただいま！」

ソファーに腰掛けている男、ジョン・メイトリックスが声のした方を向く。

「……ああ、ジェニーか。おかえり」

「どうしたのパパ？そんなだるそうにしちゃって。シンディさんと喧嘩でもしたの？」

「ああ、実はな……」

*

「ふうん、ここ二週間の記憶が無い……ってことね？」

キッチンに立ったジェニーが、メイトリックスの状態を確認する。

「ああ。何処かに行っていたような気もするが……悲しいことがあっ

たような気もするんだ」

テーブルに座り、雑誌を読むメイトリックスはそう返す。

「焦ること無いわ、そのうち思い出すわよ。はい、サンドイッチおまちどー！」

二人分のサンドイッチをテーブルに運んだジェニーは、自分もテーブルに座った。

「なあジェニー、なんでガール・ジョージじゃないんだ？」

「まだ言ってるのパパ？相変わらず古いんだ」

雑誌を置いたメイトリックスは、サンドイッチを掴んでかぶりついた。

（しかし…この違和感はなんだ？何か大事なことを忘れているような…）

*

そしてその頃、ビスコッティでは

「…んん」

「ごめん、起こした？」

資料室で目を覚ますリコッタ。

どうやら彼女を訪ねたノワールが何かを渡しに来たようだ。

「…ううん、平気であります」

「ジョンの里帰りがそんなに大変だって知らなくて…私、ちゃんと気づけばよかった」

そう言ったノワールは俯く。

「それが勇者様の望みでありましたから…」

すると持っていた本の山を、ノワールがリコッタに手渡した。

「これ、ガレットの図書館から持ってきた召還に関する書物」

「ありがとうございます」

その時、本の隙間から何かが落ちた。

「これ…ビスコッティ領主の物じゃ…」

それは一通の白い封筒だった。

リコッタはそれを拾い上げ、中の手紙を確認する。

そこには【王立研究院宛 勇者召還について】と記載されていた。

「……あッ！」

バタンッ！！

何かを見つけたのか、リコッタが資料室から飛び出した。

*

「姫様！姫様！こんな早朝に申し訳ないであります！」

リコッタが向かったのはミルヒオーレの部屋だった。

「リコ、どうしたんです？」

「姫様…勇者様から何か預かっていたでありますよね！？」

「え…あ、はい」

返答したミルヒオーレは、机の中から小さな箱を取り出した。

「式典の際、「自分が元の世界に帰ったら開けてほしい」と…」

「中身は!？」

「そ、それはまだ…」

リコッタの気迫に、若干たじろぐミルヒオーレ。

「開けてみてほしいであります!もしかすると…もしかするのであります!」

「あ、はい」

ミルヒオーレが箱を開けると、そこには黒い腕時計があつた。

それはコマンドー本編にて使用していたのと同じ物だ。

そして一枚の紙が目に入った。

「これは…」

それは、メイトリックスがミルヒオーレに宛てた手紙…もとい誓約書だった。

『親愛なる姫、ミルヒオーレ・F・ビスコッティ様へ。勇者ジョン・
メイトリックスより感謝と愛と友情を込めて。追伸、I・I・I・b
フィアン』

e b a c k !」

そう記載されていた。

「う…うう…」

俯いたまま、リコッタが震え始めた。

「リコ…?」

「……やったーーーー!!」

歓喜するリコッタに対し、ミルヒオーレは状況をよく飲み込めていない。

「これなら…勇者様の再召還が可能です!!」

それを聞いたミルヒオーレの目に涙が浮かぶ。

しかしそれは悲しみではなく、喜びの涙である。

「やっぱり勇者様…ちゃんと約束を守ってくれたであります!!」

そう、何故ならば…

「最初の帰還から再召喚までは91日以上空ける」

「召喚主以外の3名以上に、また来るといふ誓約と共に勇者の身に着けていた物を預けておく。内容は問わないが、勇者が元の世界から持ち込んだ物がよい」

「召喚主に対しては、勇者と召喚主の名前が書かれた約束の書と誓約の品を渡しておく」

以上の三つが、勇者再召還の条件なのだから…

*

数日後、メイトリックスとジェニーはシンディを招待し、自宅でバーベキューパーティーを開いていた。

「大きくなっただねジェニー」

「ええ、シンディさんもお変わりないようで」

その横ではメイトリックスがトングを使い、肉をひっくり返していた。

「さ、二人とも焼けたぞ」

だが焼き過ぎたのか、肉は二枚とも焦げていた。

「焦げてるじゃない！一体何があったのか教えて頂戴！」

「駄目だ」

「駄目え！？そんなぁ！」

そんなシンディに対し、メイトリックスは笑っていた。

「ははははは。冗談だ、それは捨てておけ。それより薪が少なくなってきたな…シンディ、薪を取ってくるからコンロを頼んだぞ」

火のついたコンロをシンディに任せ、彼はその場を後にした。

「よし、これだな」

玄関横の倉庫に保管してあった薪の束を掴み、二人のところへ戻ろうとするメイトリックス。

「…ん？」

だが彼の正面に、茶色い犬が座ってこちらを見ていた。

「お前も食うか？」

するとその犬はメイトリックスに駆け寄ってきた。

「…ん？」

よく見ると、犬の首に巻かれている布に白い封筒が挟まっている。

それを抜き取ったメイトリックスが開封すると、中からはゴム製の銃弾が出てきた。

「…！！」、これは…！」

その時、メイトリックスの中で封印されていた記憶の鍵が音を立てて開いた。

それはフロニヤルドで作られた、戦用の銃弾だった。

「ジェニー…シンディ…俺はこの二週間…何をやっていたか思い出したようだ…！」

自分が勇者であることを思い出し、メイトリックスは小さくガッツポーズをとった。

《パパー！お肉焼けたわよー！》

裏庭からジェニーの声が聞こえる。

「ああ！今行く！」

メイトリックスはゴム製の銃弾をポケットに仕舞い、薪の束を掴んでジェニー達が待つ裏庭へと戻っていった。

「お姫様……もう会うことはないといったな、あれは嘘だ」

もう会うことはないでしょう（後書き）

以上で終了となります！完結できてよかった…

ここまで読んでくださった読者の皆様、組合員の皆様本当にありがとうございました！

何か新たなコマンドーorシユワ映画小説を思いつき次第、また投稿したいと思います。

これからもよろしくお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3035t/>

COMMANDO DAYS

2011年11月14日16時53分発行